

27号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

27号横穴墓は北支群中央の斜面にあり、南西方向に開口する。標高は約31mである。全長は約3.9mを測り、主軸方向をN-56.5°-Eに測る。保存状態は良好であった。また本調査の結果、27号は墳丘を持つ横穴墓と判明した。斜面の遺構検出作業中にテラス状遺構の供献土器群を検出し、これらを精査しながら土層とその周辺の遺構検出を続行したところ、ついに横穴墓前庭部プランを確認するに至った。続いて墳丘-墓道間の埋土の検討、前庭部土器の取り上げ、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設の除去後、良好な埋葬人骨の遺存が確認されたため、玄室内の調査は一旦中断した。数日後、九州大学医学部第2解剖学教室室員の参加協力の上で改めて玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ1.44m、幅1.46mであり羨門部に向かって広がる平面形を呈している。前庭部の斜面下方は旧地表と推定される黒褐色の風化土層であり、前庭部掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。前庭部床面はほぼ平坦であるが、羨道部前面の0.18m付近で再度下降する。側壁の傾斜は両者に差異があり、40-70°を測る。また、羨門部壁の傾斜は約45°を測る。

羨門部の保存状態は良好である。規模は高さ0.6m、幅0.57mを測る。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、入念に構築されている。閉塞の配石は形状と使用部位によって次の2群に分けられる。第1群は長さ0.5m、幅0.8-0.9m、幅10cm程度の安山岩製板石が2枚である。これらを立てかけるようにして羨門部を覆う。第2群は幅・長さ20-40cm程度の河原石および地山包含円礫20個程度からなり、1群下半部を覆う。以上の配石によって前庭部は面積では約半分、堆積ではおよそ3分の1が埋まる。この配石の上に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

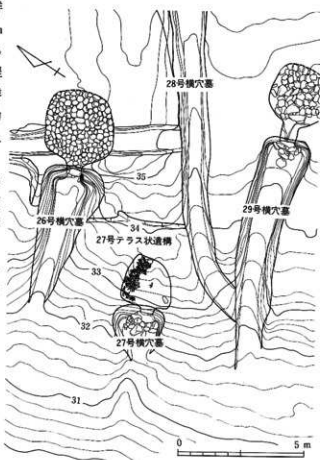
b) 前庭部内埋土、テラス状遺構土層 前庭部内およびテラス状遺構の堆積土層はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能である。前庭部内埋土は全体で4層群11層に分層した。以下、堆積順に説明を加えたい。

第1層群(Ⅸ層)は初葬時の前庭部内埋土と推定される。内部に地山礫を多く含み、前庭部形成時に堆積した基盤層を含むが、上面は風化している。

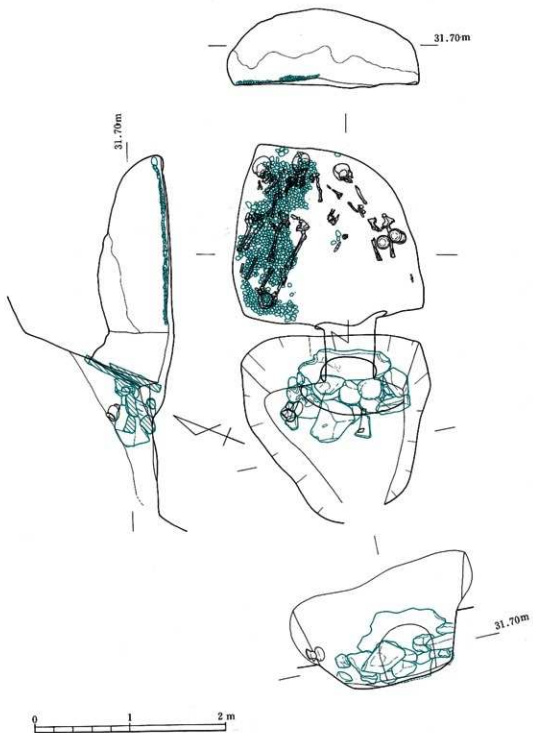
第2層群(Ⅶ・Ⅷ層)は追葬時の前庭部内埋土で、さらに2層に細分される。下層は上層に比して、地山礫を多く含む傾向があり、基盤の二次堆積層である。

第3層群(Ⅵ層)は前庭部堆積後に形成された風化土層である。

第4層群(Ⅱ層)はテラス状遺構盛土より連続する土層で、第3層群形成後に流れ込んだテラス状遺構の盛土と思われる。前庭部内埋土の検討からは都合2回の埋葬



第164図 27号横穴墓テラス平面図



第165图 27号横穴墓平・断面图

行為が認められたが、玄室から出土した人骨は3体を数える。

テラス状遺構の盛土は上下二層(Ⅱ・Ⅴ層)に分層される。下層は地山礫や偏平の河原石を含み、横穴墓掘削時に形成された盛土と思われる。上層は、下層堆積後に形成された盛土である。またテラス状遺構の墳端には周溝の掘り込みが認められる。周溝は墳丘盛土を切り込んで形成されており、横穴墓掘削からかなりの時間が経過した後に形成されたものである。周溝内埋土は黒褐色土・黄褐色土・黒褐色土の順で堆積している。上下の黒褐色土には多量の遺物を包含しているが、時期差はほとんど認められない。黄褐色土は遺物を含まない間層となる。周溝の埋没後、さらに墳丘が形成された痕跡があり、Ⅰ層はその墳丘土の一部である可能性がある。

2) 羨道、玄室

羨道は床面で、幅0.52m、長さ0.93mを測る。床面は約20°の傾斜で玄室に向かって下降し、玄室との接続部分で最深となる。天井部は床面とほぼ平行になると思われるが、崩落により明らかでない。玄室はドーム形を呈し、長さ約1.8m、幅約2.0m、高さ0.65mを測る。床面は標高31.3mで、中央部にむかって緩やかに凹み形状となる。玄室北側には礫床を設ける。礫床は直径5cm前後の河原円礫が使用されている。

玄室内の前半部分は、天井部の崩落により多量の堆積土が認められたが、奥半部の堆積土は比較的うすく、礫床の一部がのぞいていた。

3) テラス状遺構

本横穴墓羨門壁頂部の斜面約3.5m付近に階段状の地山整形が認められた。地山整形はテラス状遺構に付属する周溝の掘削により、ゆるやかに湾曲している。上場線は標高34.2mである。土層観察の経過、20~40cm程度の墳丘盛土が認められた。墳丘は時間を隔てて数度に渡って、形成されている。(吉田 寛)

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 3体が埋葬されていた。いずれも奥壁に頭を向けた仰臥伸展葬であり、左から1号人骨・2号人骨・3号人骨で、前二者は礫床上に葬られていた。

1号人骨は、熟年男性で、一見すると原位置を保っているようであるが、ほとんどの骨が少しずつ動かされている。すなわち、顎関節・左肩関節・左右股関節・左右膝関節と、残存した関節部はすべて外れており、右大腿骨は反転し、上腕骨と寛骨も左右が近接して、全体的に左側壁の方へ押しやられた状態である。

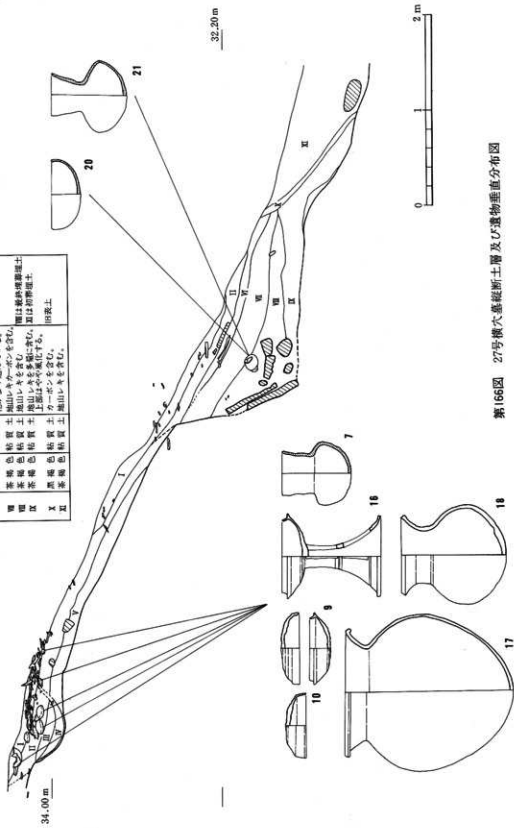
2号人骨は、成年男性で、落石によって移動したと思われる左鎖骨を除けば、ほとんど原位置を保っている。右上腕と前腕は、本来1号人骨の左腕があるべき位置にある。また、右前腕は回内した状態であり、右大腿骨上の刀子を握っていた可能性がある。両足の土間に口縁部を一部打ち欠いた須恵器壺があり、左腕の外側には先端を足の方に向けた一群の鉄鏃が副葬されている。

3号人骨は、成年女性で玄室の長軸線にそって礫床上に葬られていた1・2号人骨と異なり、むしろ右側壁にそって葬られていて、礫床はない。落石による破損が大きい。ほぼ原位置を保つ。頸部から胸部にかけて玉頭を装着していたようであり、大腿部に土師器碗3個を副葬する。また、足元には鉄製品を伴う方形の黒色土のブロックが認められたので、金具をもつ箱状の副葬品が存在したことが考えられる。

これら3体の埋葬順位は、1号人骨が壁側へと押しやられており、2号人骨は原位置を保ち、かつ一部は礫床からはみ出していることから、1号人骨が先に葬られ、1号の軟部組織の腐朽がかなり進行した時点で2号人骨が追葬され、その際に礫床の中央にあった1号人骨を壁側へと押しやったものと推定される。2号人骨と3号人骨の関係は、3号人骨が礫床をもたず、この横穴墓の長軸線に平行ではなく、むしろ右側壁にそって葬られていることからみて、2号の後に最終埋葬として3号人骨が葬られたと考えられる。すなわち、3体目の埋葬にあたって、玄室内の空間利用や通路の便宜から右側壁にそって葬られたと推定されるのである。また、2号人骨に副葬された鉄鏃は、矢柄と矢羽根が着けられていたなら3号人骨の上半身と交錯することになるが、これも、3号人骨の後に2号人骨が葬られたとすると、3号の上に矢をのせたことになり、不自然である。したがって、この点

27号横穴墓土層観察表

層	色	土名	特	注	詳細・解説
I	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
II	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土 (黄緑層土)	
III	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
IV	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
V	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
VI	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
VII	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
VIII	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
IX	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	
X	黄褐色	粘質土	埴山小レキカカーボンを含む。	埴山盛土	



第166図 27号横穴墓経断土層及び遺物垂直分布図

からも2号→3号という順位が支持される。

のように、本横穴墓における埋葬は、1号人骨→2号人骨→3号人骨の順に行われたと推定される。

(田中良之)

b) 副葬品 2号人骨の足許に須恵器壺1、3号人骨の足許に土師器碗3が認められた。また2号人骨と3号人骨の間に鉄鏝9、3号人骨南側に鉄鏝2、玄室中央部より石突2が出土している。加えて3号人骨頸部付近からは、首飾りとして使用されたと思われる勾玉2、管玉10、丸玉9が発見されている。

2) 前庭部内

前庭部の閉塞石上より、完形の土師器壺1、長頸壺1および須恵器杯の胴部1、高坏脚部1、土師器碗の口縁部の破片1が出土している。これらのうち完形の壺と長頸壺は、閉塞完了後に、閉塞石左側の石組み上に安置された状況で出土している。

3) テラス状遺構内

テラス状遺構に付属する周溝内埋土より、多量の遺物が出土している。出土遺物は完形に復元できる須恵器蓋坏2セット、坏蓋7、坏身9、有蓋高坏1、壺1、甕1および高坏口縁部1、坏の胴部4、口縁部10、提瓶の胴部1の破片があり、土師器では直口壺1、碗1のほか若干の破片、鉄器では刀子1が認められる。土器群は周溝が埋まる過程で、須恵器蓋坏を一括埋置し、その後土をかぶせその上に甕などの破砕土器群を散布するという状況がみられる。なお須恵器大甕と壺は、26号横穴墓墓室Ⅲ層出土遺物と接合する。(吉田 寛)

4. 27号横穴墓出土人骨の所見

成人3体(男性2体、女性1体)の人骨が検出された。

27-1号人骨(男性・熟年)

〈保存部位〉

頭蓋骨：頭頂部から前頭部および右側頭部にかけて破損があり、かなりの変形がみられる。また、赤色顔料の付着が認められる。残存歯牙の歯式は以下のとおりである。

$\begin{array}{cccccccc} / & M^2 & \times & P^2 & \Delta & \circ & I^2 & I^1 \\ \hline / & / & M_1 & P_2 & \circ & C & I_2 & I_1 \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} & I^1 & \circ & \circ & \Delta & P^2 & \circ & / \\ \hline & I_1 & I_2 & C & P_1 & P_2 & M_1 & / \end{array}$
---	--

× 歯槽閉鎖 ○ 歯槽開放 △ 歯根のみ / 破損・不明

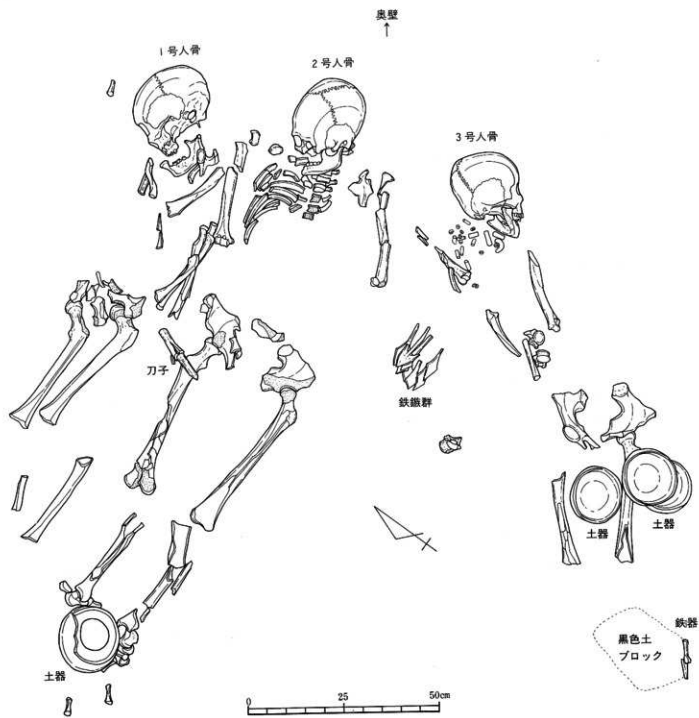
体部骨：左鎖骨片、左肩甲骨片、左上腕骨体部、寛骨片、左右大腿骨、左胫骨体部。

〈性別・年齢の推定〉

性別：側頭線は明瞭であるが乳様突起の発達と比較的弱い。また、四肢骨における筋付着部の発達も中程度であり、どの特徴もいまま一つ説得力に欠ける。本人骨は初葬者であるため、性別判定は大きな意味を持っている。そこで、出来るだけ多くの情報から総合的に判定するために、中橋(1987)の方法により性別判定を試みた。

	現代人平均値			上ノ原 中央値 27-1
	男	性	女	
外後頭隆起厚	17.9	15.7	16.8	18
頬骨幅(1cm)	14.4	12.2	13.3	15
乳様突起高	28.3	23.4	25.9	23
乳様突起幅	11.2	9.1	10.2	11
大腿骨中央周	83.6	76.3	80.0	87
脛骨栄養孔位周	89.7	79.6	84.7	91

(mm)



第167図 27号横穴墓女室内人骨出土状態

表からも明らかなように、乳様突起高を除くと計測値は男性に傾いており、本人骨の性別は男性という推定を支持している。

年齢：歯牙咬耗度は Broca の 2 度、頭蓋主縫合の内板は閉鎖し、外板の閉鎖もかなり進行していることから熟年と推定した。

〈形質〉

脳頭蓋は割れた部分が変形しているために計測は出来なかった。顔面部の形質は、上顔高が比較的高いようである。眼高は中型、鼻指数は中鼻型に属している。鼻根部の陥凹も弱く、全体的に面長な顔立ちであったと推察される。咬合型式は鉗子咬合、歯槽性の突顎が認められる。頭蓋非計測の形質では、翼上骨（左）が認められた。また、後頭骨に膨隆が認められた。身長は推定は出来なかった。

27—2号人骨（男性・成年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：右後頭部と右顔面骨を破損しているが、保存状態は比較的良好である。赤色顔料の付着がみられる。残存歯牙を以下に示す。

$\begin{array}{cccccccc} // & // & // & // & // & // & // & // \\ \hline \dot{M}_2 & \dot{M}_1 & \dot{P}_2 & \dot{P}_1 & \dot{C} & // & // & // \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} \bigcirc & \bigcirc & C & P^1 & P^2 & M^1 & M^2 \\ \hline / & I_2 & C & P_1 & P_2 & M_1 & M_2 \end{array}$
--	---

○ 歯槽開放 · 遊離歯 / 破損・不明

体部骨：左鎖骨、左右肩甲骨片、左右上腕骨片、左前腕の近位部、肋骨片、椎骨片、左右寛骨片、左右大腿骨片、左右脛骨片、足根骨および中足骨片。

〈性別・年齢の推定〉

性別：乳様突起と眉弓の発達が良好で、四肢骨も太く、明かに男性である。

年齢：歯牙咬耗度は Broca の 1～2 度である。第 3 大臼歯は未萌出であるが、四肢骨に骨端線は見られず、成人に達していると推定されることから、先天性欠如の可能性もある。また、頭蓋主縫合は内板・外板ともに開離している。以上の所見を総合し、本人骨の年齢は成年と推定した。

〈形質〉

脳頭蓋の示数はそれぞれ、長頭型 (M8/1=71.4)、正頭型 (M17/1=71.2)、尖頭型 (M17/8=99.3) に属している。咬合型式は不明である。頭蓋非計測の形質では、ラムダ小骨、翼上骨（左右）、眼窩上縁孔（左右）、眼窩上神経溝（左右）が認められた。

また、発掘現場で計測した左大腿骨最大長 (455mm) から、ピアソンの式を用いて求めた推定身長は 166.8cm である。

〈特記事項〉

右下腿遠位の脛腓関節部に炎症が見られ、下端より 6 cm のところには二次的関節面が形成されている。

27—3号人骨（女性・成年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：左側頭部を破損するが保存状態は比較的良好。赤色顔料が付着している。残存歯は以下のとおりである。

$\begin{array}{cccccccc} / & M^2 & M^1 & P^1 & P^1 & C & I^2 & I^1 \\ \hline / & M_2 & M_1 & P_2 & P_1 & C & I_2 & I_1 \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} \bigcirc & \bigcirc & C & P^1 & P^1 & M^1 & M^1 & M^1 \\ \hline / & I_1 & I_2 & C & P_2 & M_1 & M_2 / \end{array}$
---	---

○ 歯槽開放 / 破損・不明

体部骨：左上腕骨体部、右上腕骨遠位部片、左前腕近位部片、左右寛骨、左大腿骨片、肋骨および椎骨少量。

〈性別・年齢の推定〉

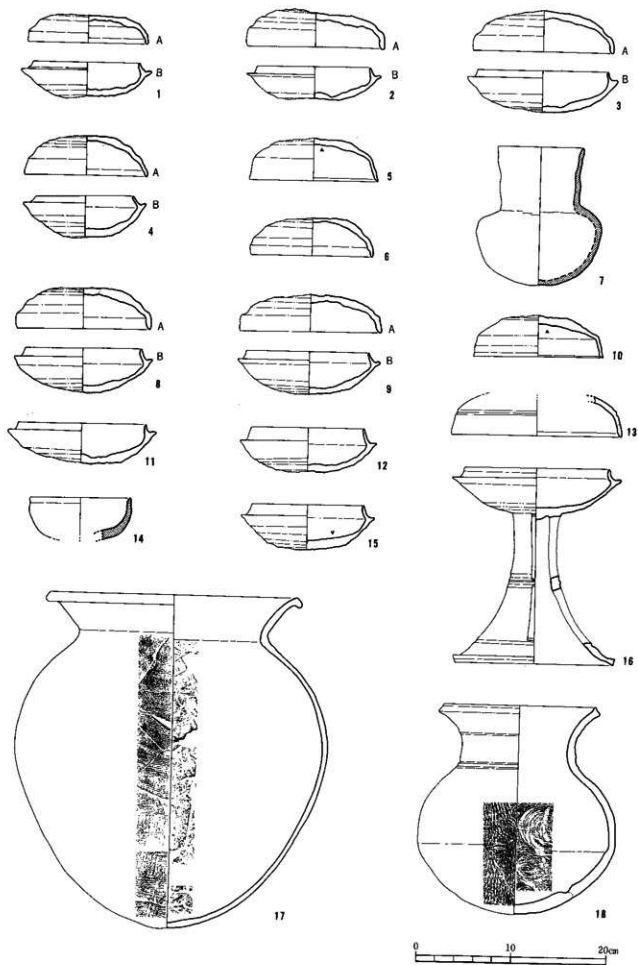
性別：頭蓋骨および骨の形状は明かに女性の特徴を示している。

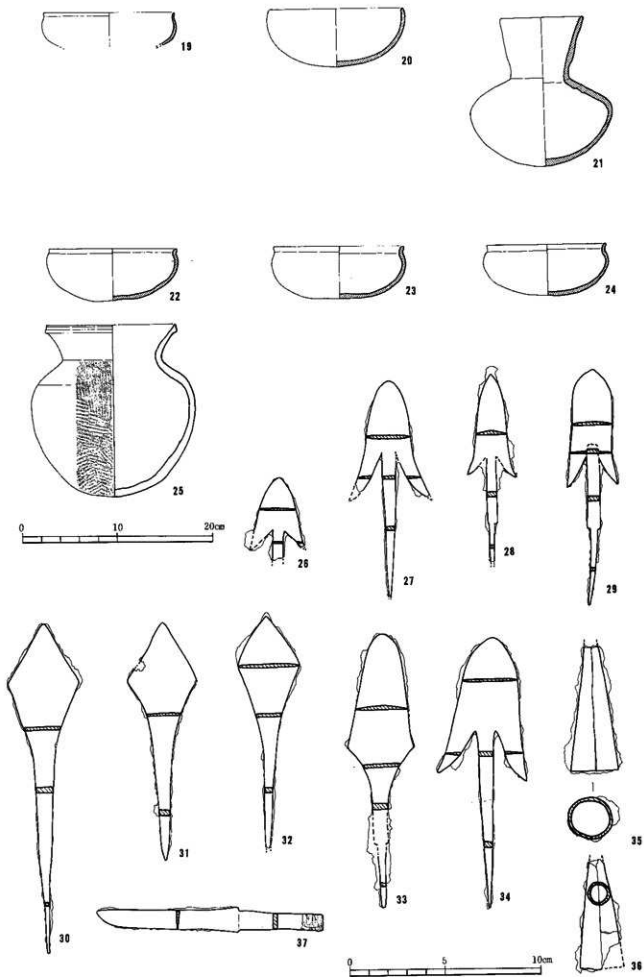
年齢：歯牙咬耗度は Broca の 1～2 度である。第 3 大臼歯は左上顎のもの以外は未萌出であるが、2 号人骨と同様に先天性欠如の可能性があると思われる。頭蓋主縫合は内板・外板ともに開離している。以上の所見から、3 号人骨の年齢は 2 号人骨とほぼ同じ位の成年と推定される。

〈形質〉

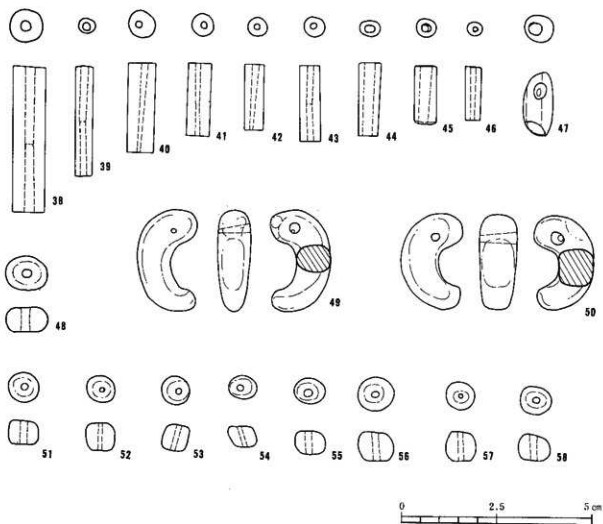
脳頭蓋の示数のうち得られたものは長高示数だけで、高頭型 (M17/1=78.4) に属していた。顔面部は、上顔高はやや低いが鼻根部の陥凹は非常に弱く、全体に平坦な顔貌である。咬合型式は鉛子咬合であり、齒槽性突顎の傾向がみられる。

頭蓋非計測的形質では、2 号人骨にも見られたラムダ小骨が認められた。(土肥直美)

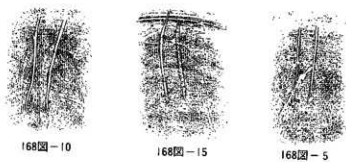




第169图 27号横穴墓出土遗物实测图(2)



第170图 27号横穴墓出土遺物尖副冑(3)



第171图 27号横穴墓出土土器へら記号

第59表 27号横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	施成		
1	A	壊蓋 ・12.5 ・5.8 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	微砂粒を含む 精緻	良好 堅緻		
1	B	壊身 ・11.1 ・3.6 ・13.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、底部は、やや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	黒灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
2	A	壊蓋 ・14.2 ・3.7 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		
2	B	壊身 ・11.8 ・3.3 ・14	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は浅くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
3	A	壊蓋 ・14.8 ・4.3 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部は低く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰色	白色砂粒 石英粒をやや多量に含む	良好		
3	B	壊身 ・13.6 ・4.4 ・15.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色	白色砂粒と 石英粒を含む	やや不良		
4	A	壊蓋 ・12.7 ・4.2 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	微砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
4	B	壊身 ・10.1 ・4.4 ・12.9	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
5	壊蓋	・13.8 ・4.5 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は内傾する面をなす。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り	淡青灰色	細砂粒を含む	良好 堅緻		内面天井部「H」
6	壊蓋	・12.7 ・4 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。内面端部付近はやや肥厚する。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰褐色	微砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
7	直口壺	・9 ・14.6 ・13.1	口縁部はほぼ直立しなごらのび、端部は丸い。胴部はだ円形を呈し最大径は上方にある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ ヨコ方向の ヘラミゴキ	黄褐色	細かい角閃 石粒を多量に含む	不良	土師器	
8	A	壊蓋 ・14.2 ・4.2 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ 叩きの後ナデ?	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	白色砂粒、 石英粒をやや多量に含む	良好	天井部の粘土は北点して仕上げている	
8	B	壊身 ・12.3 ・4.5 ・14.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ヘラケズリ	淡灰色	白色砂粒を やや多量に含む	良好 やや軟質		

番号	器種	法量 口径 器高 胴部最大径	形態の特色	技法の特色				備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土		
9	A 坏 甕	・14.6 ・4 —	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	石英、白色砂粒を含む	良好 堅緻	
9	B 坏 身	・12.6 ・4.5 ・14.9	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は上方にのび、肩部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	調整ナデ	回転ヘラケズリ	淡灰褐色	1~2mmの石英粒を含む	不良	
10	坏 蓋	・13.8 ・4.3 —	口縁部は外反しながらのび、肩部は内傾する。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り	淡灰色	2~3mmの石英、細砂粒を含む	良好 堅緻	内面天井部「I」
11	坏 身	・13.2 ・4.2 ・15.6	たちあがりはやや短く直立してのび、肩部は丸い。受部は肥厚しながら水平にのび、肩部は丸い。底部はやや深く平らである。	回転ナデ 回転カキ目 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	淡黄灰色	石英粒を多量に含む	不良	
12	坏 身	・11.9 ・4.5 ・14.5	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は細く水平にのび、肩部はとがりきみである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	1~2mmの砂粒を含むが精緻	良好 やや軟質	故意に受部端をうち欠いている
13	坏 蓋	・18 ・4.2+α —	口縁部は外反しながらのび、肩部はうすく内傾する段をなす。外面にはうすい稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	精緻	やや良好 堅緻	
14	流 石	・10.5 ・4.2 —	口縁部はほぼ直立しながらのび、肩部は丸い。	ヘラミガキ	回転ナデ ヘラミガキ	黄褐色	角閃石、石英粒を含む	良好 堅緻	外面は口縁部に黒斑あり 外面は部分的にベンガラ付土器
15	坏 身	・11.8 ・4.7 ・14.3	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は細く上方にのび、肩部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄灰色	砂粒を多量に含む	良好	内面底部「II」
16	有蓋 高坏	・15.3 ・20.4 ・18	坏部のたちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は水平にのび、肩部は丸い。底部はやや浅い。胴部は下方にのび、外面中心部に2本の沈線を通す。肩部は面をなす。四角形二段スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ の後に 回転ナデ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻	
17	甕	・27.1 ・34.9 ・33.1	口縁部は外反しながらのび、肩部は面をなし丸い。胴部の最大径はやや上方にあり、底部はとがりきみ。	回転ナデ 同心円状タタキの上からナデ消し 指オサエ	回転ナデ 回転カキ目 平行タタキの上から 回転カキ目	黄灰色	精緻	軟質	
18	甕	・15.3 ・22 ・20.2	口縁部は外反しながらのび、肩部は面をなす。胴部は円形を呈し、最大径は中心部にある。底部は深く丸みをおびる。	同心円状タタキ 回転ナデ ナデ	平行叩き文 回転ナデ	青灰色 部分的にベンガラを塗布しているため赤褐色	精緻	良好 堅緻	外面にベンガラ塗布

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 上	焼 成		
19	罎	・14 ・3.2+α ・14.4	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で外反し丸い。	調整不明	調整不明	淡褐色	精緻	良好	土師器 反転還元	
20	罎	・14.2 ・6.1 ・14.8	口縁部は内湾しながらのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	ヘラムガキ	ヘラムガキ	淡褐色	精緻	良好	土師器	
21	直口 壺	・9.1 ・15.5 ・15.2	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部はよほど最大径は中心部にある。底部は丸みをおびる。	ナデ	ナデ ハケ目	赤褐色	1mm前後の 砂粒を含む	良好	土師器	
22	罎	・13.4 ・5.4 ・14	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で外反し丸い。底部は深くやや平らである。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ ケズリ	赤褐色	0.5-2mmの 石英、雲母 の微砂粒を 含む	良好	土師器	
23	罎	・13.6 ・5.5 ・14.2	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で外反し丸い。底部は深く平らである。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ケズリ	明褐色	0.5-3mmの 石英、角閃 石、雲母粒 を多量に含 む	良好	土師器	
24	罎	・12.7 ・5.3 ・13.3	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で外反し端部は丸い。底部は深くやや平らである。	ヨコナデ 調整ナデ	ヨコナデ ケズリ	明褐色	0.5-2mmの 石英、雲母 の微砂粒を 含む	良好	土師器	
25	壺	・13.6 ・17.9 ・17.4	口縁部は外反しながらのび、肩部は面をなす。胴部は円形を呈し、最大径は上方にある。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 底部指オサ エ	回転ナデ 平行叩き後 回転ナデ	淡青灰色	3-4mmの石 英粒を含む	不良		

第60表 27号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	胴部長 (刀縁)	刃幅	柄幅	刃部厚	胴厚	備考
26	鉄鏃	4.3以上	3.7	2.3	0.5	0.15	0.1	
27	同上	11.4以上	6.2	2.5	0.7	0.15	0.2	
28	同上	9.9以上	5.3	1.8	0.4	0.2	0.3	
29	同上	12.3以上	6.0	2.2	0.6	0.15	0.25	
30	同上	17.3	6.3	3.3	0.9	0.2	0.3	
31	同上	12.5	5.8	3.6	1.0	0.1	0.3	
32	同上	12.2以上	5.2	3.2	1.0	0.2	0.3	
33	同上	14.3	7.5	3.5	1.0	0.2	0.3	
34	同上	14.2	7.2	3.6	0.7	0.1	0.3	
35	石突							
36	同上							
37	刀子	11.9	7.5	1.0	0.8	0.1	0.2	鹿角片板根皮巻の一部残存

第61表 27号横穴墓出土玉類計測表

(単位: mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
38	管玉	碧玉	暗緑	38	8.5	2.5	6.4	両面穿孔
39	*	*	淡緑	28.5	4.5	2~1.5	1.35	両面穿孔
40	*	*	青白	23.5	7	1.5~1	2.35	片面穿孔
41	*	*	青白	19	6	1.5~1	1.25	片面穿孔
42	*	*	青白	17.5	5	2~1	0.7	片面穿孔
43	*	*	青白	20	5.5	1.5	1.3	両面穿孔
44	*	*	淡緑	19	6~5	2.5	1	片面穿孔
45	*	*	淡緑	15	6	3	0.75	片面穿孔
46	*	*	青白	14	4	1.5~1	0.4	片面穿孔
47	管玉(?)	ガラス	緑	17	7.5	4	1.3	2カ所穿孔
48	丸玉	*	緑	11	6.5	4	1	
49	均玉	碧玉	暗緑	27	9(+)	4	4.6	片面穿孔
50	*	硬玉	白~青緑	24.5	9.5(+)	3.5~1.5	5.9	片面穿孔
51	丸玉	ガラス	濃藍	8	6	2	0.55	
52	*	*	青	8	7.5	1	0.6	
53	*	*	赤茶	7	6.5	1.5	0.6	
54	*	ガラス	濃藍	7	5.5	1	0.5	
55	*	*	濃藍	8	6	1.5	0.6	
56	*	*	濃藍	9.5	7.5	2	0.9	
57	*	*	濃藍	9.5	7	2	0.9	
58	*	*	濃藍	8	7~6	1.5	0.7	

28号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

28号横穴墓は北支群ほぼ中央の斜面にあり、南西方向に開口する。全長は約17.9mで標高は残存する墓道部の上端で測ると約36.3m前後である。主軸方向はN-56.5°-Eにとる。保存状態は良くなかった。斜面の遺構検出作業中に本横穴墓墓道部の風化土層埋土が検出され、発見の契機となった。墓道部の一部と羨道部及び支室は県道下に位置している。このため昭和58年度はその年度に検出された墓道部の調査を行い、あらためて昭和60年度に県道う回路をもうけ、旧県道下の墓道部の一部と羨道部及び支室の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約13.7m、残存幅は入口～前庭部前面3.5m付近までは幅1m前後の平面形を呈し、墓道入口付近は1.2～2.3mの幅で、羨門に向かって広がる平面形を呈している。しかし後世の造成時に相当の削平を受けており残りは良くない。前庭部前面の左壁沿いには0.5×0.6m前後の台形状の造り出し部を一段持つ。標高は35mではほぼ平坦である。前庭部床面とは約10cmの段差を持ち、約65°の傾斜で下降している。墓道入口27号横穴墓のテラス状遺構を切り込んでいる。また右壁部分は逆に29号横穴墓の墓道部によって切り込まれている。造り出し部以外の床面は多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で約7°の傾斜で裾部に向かって下降している。側壁の傾斜は兩者ともほぼ同様で80°を測る。

羨門部分は天井及び側壁上部が削平されており、旧状を大きく損なっている。このため高さは推定不可能であるが、幅は0.83mを測る。

閉塞施設は削平されて旧状を大きく損なっているが、現状でみると、河原円礫を使用した状況が検出された。閉塞の配石は現状での配石と使用部位によって2群に分けられる。第1群は20cm前後の河原円礫を使用し、前庭部の下面に配置している。閉塞部の根石として使用したと推定している。第2群は20～40cm前後の河原円礫を使用し前庭部上面の羨門部寄りに配置している。第2群は削平時、或いは横穴墓使用時に抜きとられたと思われる板石の隙間を覆う閉塞群と推定される。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は、削平部分が多く全体の把握は困難を極めた。このため残存部分範囲で6層群17層に分類できる。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群 (X I・X II層) は墓道部の裾から3m程の範囲に堆積している。裾部は27号テラス状遺構の埋土を切り込んでいる。羨門部付近は整地されていて、第2層群に切り込まれている。本層群はさらに2層に分層できる。下層は堆積土層であり、上層は堆積土の風化土層である。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定する。

第2層群 (IX・X層) は第1層群を整地した後に墓道内全面に堆積している。層厚はほぼ10cm前後で羨門部付近では薄く堆積している。その後の埋葬時に整地されたものと推定する。本層群を2度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第3層群 (VI・VII層) は、羨門部から約3.5m付近で上面から切り込まれている。本層群は2層に細分でき上層は風化が進行している。本層群を3度目の埋葬時の墓道内埋土と推定する。

第4層群 (V・VI層) は前庭部中央付近に堆積している。裾部付近は既に削平されており、羨門部付近は、下層群と同様に上面から切り込まれている。本層群はさらに3層に細分できるが、墓道全面の土器一括群以外では唯一遺物の検出された埋土である。本層群を4度目の埋葬時の墓道内埋土と推定する。

第5層群 (I・II・IV層) は、第3・4層群を上面から切り込んで堆積している。さらに3層に細分されるが埋土上面は後世の削平にあい、殆ど残存していない。本層群を5度目の埋葬時の墓道内埋土とする。

第6層群 (III層) は後世の二次堆積土であり、本横穴墓の墓道内埋土に伴うものではない。

本横穴墓は残りは良くないが現時点での残存埋土で観察した結果、5度の埋葬が行われたと推定する。

2) 羨道、玄室

羨道部は床面で幅約0.9m、長さ1.7mを測る。床面は羨道のほぼ中央から玄室方向へかけて20cm前後の扁平河原円礫を敷きつめている。敷石除去後の床面はほぼ平坦である。天井部は削平されているため傾き、高さは不明である。玄室は天井部が完全に削平されていて最終床面からの残存高は20~30cm程度である。長さ2.55m、幅3.1mを測り、略方形を呈している。床面は羨道中央から続く河原円礫を敷き詰めている。その隙間を10cm前後の円礫で補填している。敷石除去後の床面は標高35.15mでほぼ平坦である。玄室内には幅10~20cmの排水溝が壁から10cm前後離されて壁の回りを巡っている。さらに中央を縦断するように排水溝が配されている。中央に配する排水溝は羨道中央まで延びている。

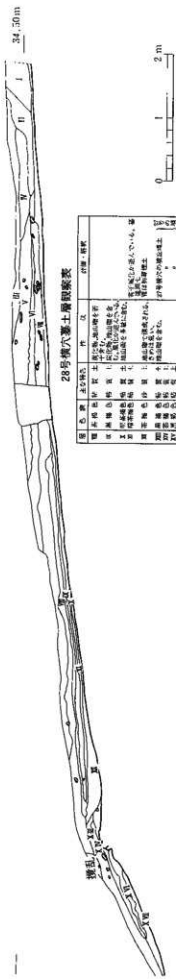
3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室・羨道内からは須恵器、鉄製品、玉類が検出された。遺物の大半は玄室全面と羨道奥寄りの地域で検出された。須恵器は坏蓋(第175図22・23)、坏身(第175図24)、平瓶(第175図20)、脚付き平瓶(第175図21)、甕の破片等である。鉄製品は刀子1、鉄鏃5、鉄鏃の破片である。刀子は玄室北西のコーナー付近で先端を北西に向けて検出された。鉄鏃は1群が玄室中央部の羨道部よりに先端を南西方向に向け、もう1群は玄室南西のコーナー付近一帯で、敷石の下より3本検出された。先端の方向は定まっておらず、また敷石の上面から滑り落ちたとも考えられない状況であり、少なくともこの付近は何度目かの追葬時に敷石を敷いたか、敷き直したと推定される。玉類は土壌洗浄時に検出されたものも含めて4点であった。

2) 墓道内

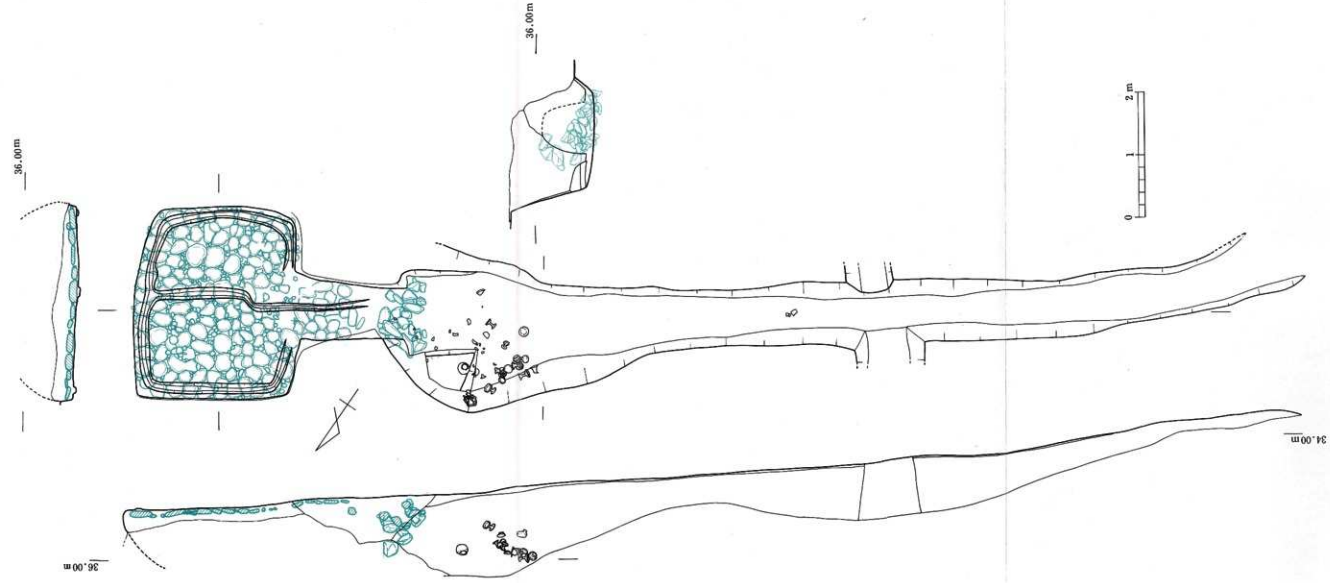
墓道内埋土の羨門部前面一帯で、多量の遺物群を検出した。いわゆる“一括埋置”の状態では4群に分類できた。A群は墓道の上場付近に位置する。平瓶1点で土圧で潰れた状態で検出された。最終埋葬時の遺物と推定される。B群(第174図8~13)は平瓶1・高坏5が検出された。C群(第174図1~7)は明確に“一括埋置”状況がうかがわれる。遺物は須恵器で、平瓶1・脚付壺1・高坏1・有蓋高坏のセット2が一括して検出された。D群(第174図14)は須恵器の壺1点だけで、“一括埋置”とは言い難い部分もある。これ以外にも高坏、鉄鏃や甕の破片等が検出されたが、甕の破片は玄室内の破片と接合する。また、高坏も“一括埋置”B群の遺物と接合関係にある。なお須恵器高坏は、29号横穴墓出土遺物と接合する。(友岡信彦)



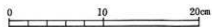
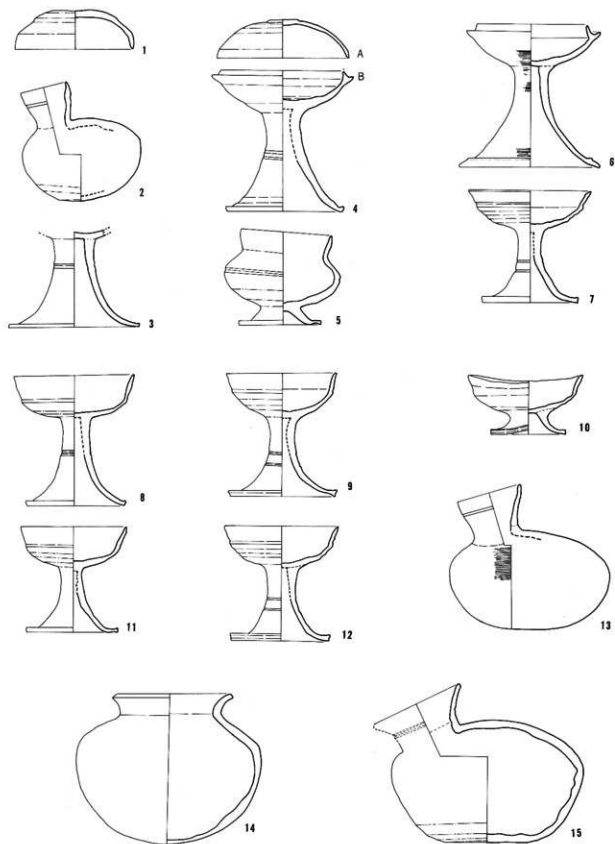
28号横穴墓土層断図

品名	数量	出土位置	出土状況
須恵器坏蓋	2	玄室北西のコーナー付近	須恵器坏蓋の破片と接合する。須恵器坏蓋の破片と接合する。
須恵器坏身	1	玄室北西のコーナー付近	須恵器坏身の破片と接合する。須恵器坏身の破片と接合する。
須恵器平瓶	1	玄室中央部の羨道部	須恵器平瓶の破片と接合する。須恵器平瓶の破片と接合する。
須恵器脚付き平瓶	1	玄室中央部の羨道部	須恵器脚付き平瓶の破片と接合する。須恵器脚付き平瓶の破片と接合する。
須恵器甕の破片	1	玄室中央部の羨道部	須恵器甕の破片と接合する。須恵器甕の破片と接合する。
鉄製品	6	玄室中央部の羨道部	鉄製品(刀子、鉄鏃)の破片と接合する。鉄製品(刀子、鉄鏃)の破片と接合する。
玉類	4	玄室中央部の羨道部	玉類の破片と接合する。玉類の破片と接合する。

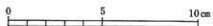
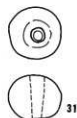
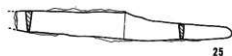
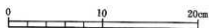
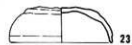
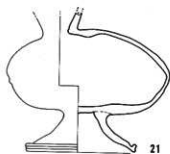
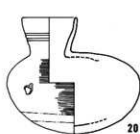
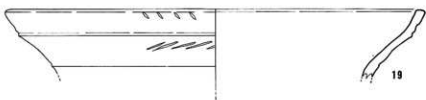
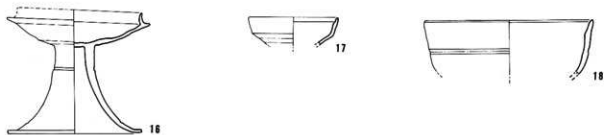
第172図 28号横穴墓断土層図



第173圖 29号橋穴墓平・断面図



第174图 28号横穴墓出土物实测图(1)



第62表 28号横穴墓出土土器観察表

(単位:cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へり記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・12.4 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明灰色	精緻	良好 堅緻		
2	平瓶	・5 ・12.5 ・12.5	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部はだ円形を呈し底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ ナデ 回転ヘラケズリ	灰黒色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
3	高坏	・13.8(底径) ・10+ ・—	脚部は下外方にのび、外面やや中央部に一本の沈線を描す。端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 調整ナデ	暗青灰色 青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻	脚部のみ	
4 A	坏蓋	・14 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く丸みをおびる。外面頂部に平らなツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	石英、角閃石粒を含むが精緻	良好 堅緻		
4 B	有蓋高坏	・13.2 ・14.7 ・15	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。 脚部は下外方にのび、端部付近で外面に屈曲し、面をなす。外面中央部に2本の沈線を描す。	回転ナデ	回転ナデ	明青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
5	脚付直口壺	・9.5 ・9.9 ・12.2	口頸部は直立してのび、端部は丸い。胴部はよくはり、外面中央部に一本の沈線を描す。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黒色 青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
6	有蓋高坏	・11.6 ・15.2 ・14	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部付近で肥厚する。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	精緻	良好 堅緻		
7	高坏	・12.8 ・11.8 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。 脚部は下外方にのび、外面中央部にうすく沈線を描す。端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	1mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
8	高坏	・12.6 ・13.7 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。 外面にはうすく稜がみられる。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	灰色 明青灰色	2~3mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
9	高坏	・11.6 ・13.1 ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜がうすくみられる。 脚部は下外方にのび端部は面をなす。 外面には2本の沈線あり。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英砂粒を多量に含むが精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
10	高坏	・12 ・5.7 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。 脚部は短く下方外にのび端部は、凹面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	青灰色	1mm大の砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
11	高坏	・11.1 ・11.2 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。 外面には稜がうすくみられる。 脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ後ナデ	明青灰色	2～3mm大の石英粒を微量含むが精緻	良好 堅緻		
12	高坏	・11.9 ・12.1 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は、ややとがりさみ。外面には稜がうすくみられる。 脚部は下外方にのび、外面中央部に2本の沈線を施す。端部は凹面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ後ナデ	灰色 青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
13	平瓶	・5.8 ・15.4 ・16.8	口頸部は外反しなからのび、端部は丸い。 胴部はだ円形を呈し最大径は中心にある。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 静止ヘラケ ズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
14	壺	・12.7 ・16.0 ・19.5	口頸部は外反しなからのび、端部は面をなす。胴部の最大径はやや上方にあり底部は丸みをおびる。	全体に磨滅しているため調整不明	調整不明	黄灰色	石英、角閃石砂粒を含むが精緻	不良		
15	平瓶	・10.2+ α ・16.5 ・20.4	口頸部は外反しなからのび、端部は丸い。胴部の最大径は、やや上方にあり底部は平ら。外面口頸部に2本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰色 青灰色	精緻	良好 堅緻		
16	有蓋高坏	・13 ・13.1 ・15	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。 底部は浅い。脚部は下外方にのび外面やや上部に一本の沈線を施す。端部は凹面をなす。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	灰白色	1～2mm大の角閃石を含むが精緻	良好 堅緻		
17	高坏	・9.3+ α ・3 ・—	口縁部は外反しなからのび、さらに外方に屈曲し端部は、丸い内面に一本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	灰色	白砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
18	カッポ 形土器	・17.6 ・58+ α ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は、内傾する面をなす。外面には一本の沈線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	0.5mm大の白砂粒を含むが精緻	良好 堅緻	反転復元	
19	壺	・44.1 ・70+ α ・—	口頸部は外反しなからのび、端部付近でわずかに屈曲し、その外面に稜をなす。	回転ナデ	回転ナデの後、稜線を付け上下にヘラケ	青灰色 灰色	1～2mmの石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
20	平瓶	・5.8 ・12.5 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。 胴部はだ円形を呈し、底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケ ズリ	暗灰～灰色	1mm大の石英粒を含むが精緻	やや不良	胴部下方に、 ななめ外側からの焼成後摩 孔がみとめられる。	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
21	脚付平瓶	・口径部欠損 ・14.8+α ・17	胴部はだ円形を呈し、最大径は中心にある。脚部は下外方へのび、端部で外側に屈曲し凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
22	坏蓋	・11.5 ・3.7 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ へら切り後 ナデ	灰黒色	1mm大の石英粒を含む が精緻	良好 堅緻		外面天井部「II」
23	坏蓋	・10.9 ・3.6 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ へら切り後 調整ナデ	灰黒色	精緻	良好 堅緻		
24	坏身	・11 ・3.3 ・—	たちあがりは細く内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平へのび端部は丸い。底部は浅くやや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ へら切り後 調整ナデ	灰黒色	石英粒を含む が精緻	良好 堅緻		

第63表 28号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

番号	器種	全長	胴部長 (J部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
25	刀子	11.4以上	6.0	1.3	0.8	0.3	0.3	
26	鉄鏃	14.9	8.0	5.2	0.5	0.4	0.25	木質残存
27	同上	9.4以上	4.0	3.2	1.5	不明	0.3	
28	同上	10.6以上	7.8	1.1	0.5	6.3	0.2	
29	同上	12.7	8.7	1.2	0.6	0.2	0.3	
30	同上	6.3以上	6.3以上	0.8	不明	0.3	不明	

第64表 28号横穴墓出土玉類計測表

(単位:mm, g)

番号	種類	材質	色調	長径	短径	孔径	重量	備考
31	丸玉	ガラス	淡緑灰	14	11.5	4~2	5.3	
32	◇	*	藍	10	7	3	0.8	半欠腐蝕
33	小玉	*	*	3.5	2	0.5		
34	◇	*	青	4	3	*		



175図-22

第176図 28号横穴墓出土土器へら記号

29号横穴墓

1. 立地・調査前の状況

29号横穴墓は北支群はほぼ中央の斜面上に位置し、南西方向に開口する。標高は34.4mを測る。全長は13.1mで主軸方向をN-71.5°-Eに測る。保存状態はかなり削平を受けているものの、残存部分については比較的良好であった。この地域一帯は後世の削平をうけ、平坦に整形されている。本横穴墓はこの平坦部の遺構検出作業中に玄室天井部が削平・崩落した状態で検出された。調査は墓道の供献土器群の検出作業を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物・礎床施設等の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約9.9m、幅1.6mであり羨門部に向って広がる平面形を呈している。墓道入口は28号横穴墓の墓道を切り込んで構築されている。床面は緩い凹凸があるもののほぼ平坦面をしている。羨道部前面から約2m付近までは約10°の傾斜で下降している。2m付近から同3.4m付近までは一旦平坦となり、その後約15°の傾斜で再度下降し、墓道入口に達する。前庭部前面にはほぼ床直上に安山岩板石1枚と40cm前後の河原円礫2個を1列に敷き詰めている。敷石除去後には玄室～羨道部から続く排水溝が検出された。羨門部と前庭部の接続地点から約1m程前庭部へと続く。

側壁の傾斜は両者に差異があり、65～78°を測る。また羨門部壁の傾斜は約80°を測る。

羨門部は天井部及び側壁上部の崩落のため旧状を大きく損なっている。このため高さは推定不可能であるが、幅は0.72mを測る。

閉塞施設は板石・河原円礫と地山円礫を使用し、入念に構築されている。閉塞の配石は形状と使用部位によって2群に分けられる。第1群は安山岩板石を3枚使用し、前庭部に敷かれた板石上に置かれるようにして羨門部を覆う。前庭部に敷かれた板石と、閉塞施設に使用された板石の間には5～10cm前後の埋土がある。この埋土は閉塞施設が追葬時に何度か開口された時点で堆積した埋土と推定される。第2群は20cm前後の扁平な河原円礫10個とやや小型の地山円礫9個を使用し、第1群を支え、隙間を覆う。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は切り合い等で層区分が複雑な部分もあり、困難を極めたが6層群14層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群 (XIV層) は前庭部敷石端部から1.5m付近まで堆積している。中央付近で層厚20cm前後を測り、基盤層で構成されている。本横穴墓形成直後に床面に堆積した基盤層の二次堆積物である。

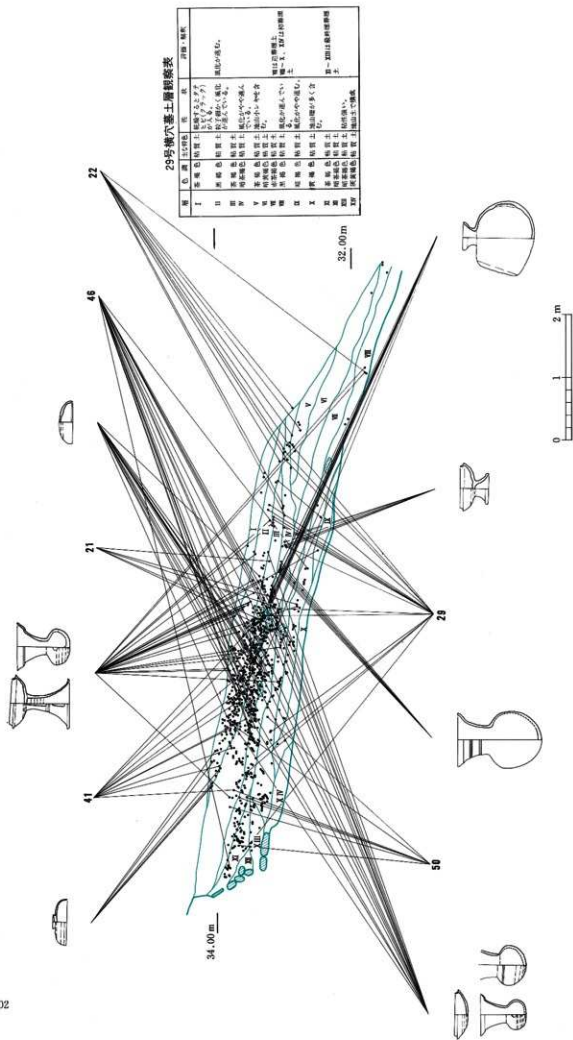
第2層群 (Ⅶ～Ⅹ層) は前庭部前面に堆積している。層厚は20～40cmを測る。さらに本層群は3層に細分される。下層は基盤層で構成されている。中層は前庭部中央付近に若干堆積しているだけであるが上・下層とは漸移面をなす。上層は風化が進んでいる。埋土内にはカーボン・土器片等多量を含む。本層群は羨門部付近は追葬時に切り込まれており、残存していない。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定している。

第3層群 (Ⅴ～Ⅶ層) は閉塞石の下面から下層群を覆って堆積している。本層群上面は標高32.8～32.5m間で緩い傾斜を持ちながら下降している。これは次の追葬時に埋土を整地したためと推定している。とくに前庭部裾部と羨門部付近は土層観察の結果、追葬時に整地及び掘り込まれた痕跡が明瞭に観察された。本層群はさらに3層に細分できるが、埋土の表土層は追葬儀礼時に整地されていると推定され、確認はできなかった。本層群を2度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第4層群 (XI～XIII層) は閉塞施設前面を覆って堆積している。本層群はさらに3層に細分される。下層・中層は前庭部の前面付近に堆積していて、閉塞施設を覆うための埋土である。上層はほぼ前庭部の前面に堆積しており、若干の風化がみられる。本層群を3度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。



第177图 29号横穴墓平·断面图



第178図 29号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

第5層群(Ⅲ・Ⅳ層)は第4層群の上面に堆積している。本層群は、下層群を切り込むことなく、さらに羨門部に接していないことより、直接埋葬行為に伴う埋土ではないと推定される。本層群はさらに2層に細分されるが上層下面から遺物が出土することより、最終埋葬行為後の追善供用時の埋土と推定している。

第6層群(Ⅰ・Ⅱ層)は後世の二次堆積土であり、本横穴墓の墓道内埋土ではないと推定している。

本横穴墓は土層観察の結果、3度の埋葬行為と1度の送葬に伴う祭祀行為が行われたと推定している。

2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅約0.65m、長さ0.86mを測る。床面は玄室方向へ向けて約4°の傾斜でゆるやかに上昇している。天井部は残存しているものの、崩落が激しく原形を留めていない。このため高さ、傾斜の角度等は不明である。前庭部に残存する敷石は羨道部では存在しない。排水溝は羨道部中央付近から玄室接続点にかけては急激に広がっている。玄室は天井部が削平されていて明確ではないが、ドーム形を呈すと思われる。高さは不明である。長さ2.35m、幅2.42mを測り、ほぼ円形の様相を示す。床面は安山岩板石1枚と30cm前後の扁平な河原円礫を敷いている。隙間なく敷き詰めているのではなく、側壁付近はかなりの隙間を持つ。玄室中央から奥壁にかけては直径10cm前後の小円礫を若干隙間に補填している。また玄室入口には安山岩板石が2枚、敷石の上部から検出された。検出状況からみて閉塞石に使用されていた板石を何度目かの埋葬時に玄室内に押し込んだものと思われる。敷石除去後の床面は標高33.3m前後を測り、ほとんど平坦であった。玄室内には幅10~15cm、深さ5cm前後の排水溝が壁に沿って巡っている。さらに中央にも1条の排水溝が検出され、これらが玄室と羨道の接続部分でひとつとなり羨道から前庭部へと続く。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内には骨片・須恵器片、鉄製品が検出された。骨片は玄室中央部で検出されたが原形は留めていない。鉄製品は9点で、鉄鏃6・刀子3である。鉄鏃・刀子は玄室の右半部で検出されていたが、群をなしているわけではなく、先端部の方向はまちまちである。追葬時に攪乱されたと推定している。

2) 墓道内

墓道内埋土からは、特にⅢ・Ⅳ・Ⅴ層を中心に多量の遺物が検出された。しかしその大半が破片であり、いわゆる“破砕散布”の状況がうかがえる。“一括埋置”の状況は見られなかった。復元後の遺物でみると、坏・有蓋高坏が主流を占めている。なお、高坏の破片が、26・31号横穴墓前庭部最上層出土の遺物と接合関係にある。

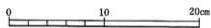
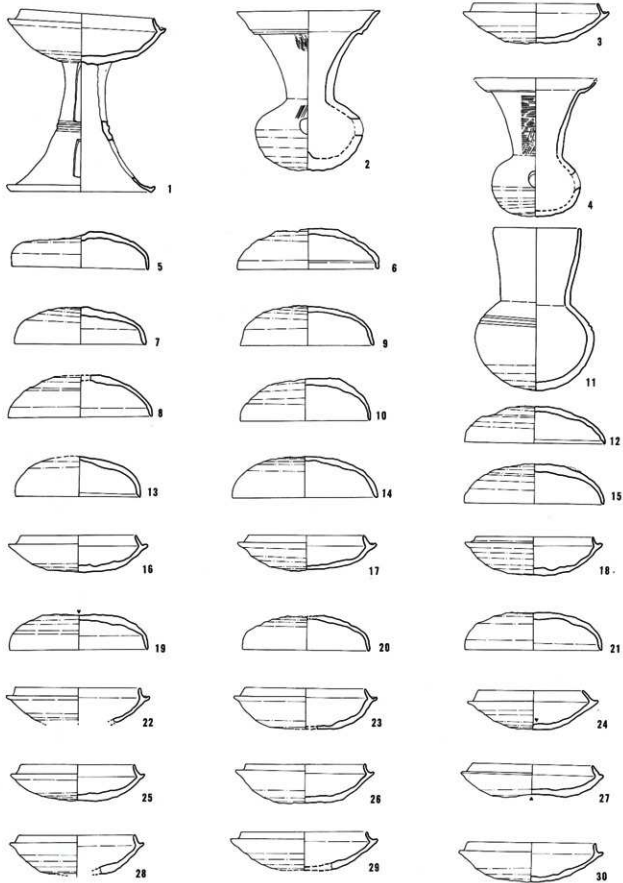
(友岡信彦)

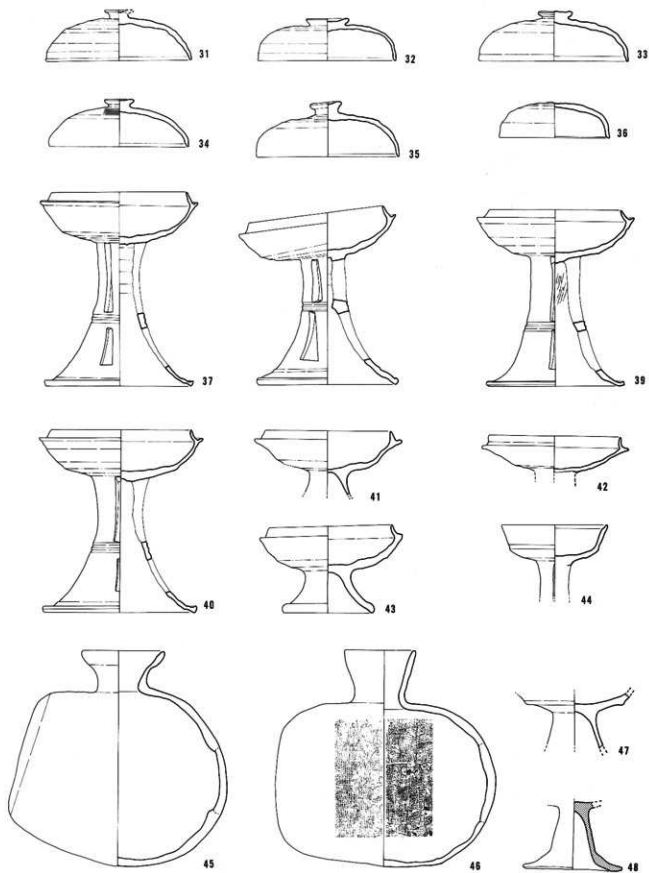
4. 29号横穴墓出土人骨の所見

左頭頂部から後頭部にかけての頭蓋冠、下顎骨小片、四肢骨小片、歯牙が検出された。出土した人骨片の量は少ないが、歯牙は明かに2体分が識別されており、少なくとも2体以上の被葬者が葬られていたと推定される。さらに、頭蓋冠はかなり頑丈でサイズも大きく、男性のものと考えられることから、被葬者の内には男性が含まれていたと考えられる。残存歯牙を以下に示す。(土肥直美)

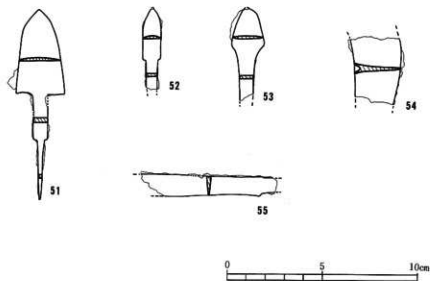
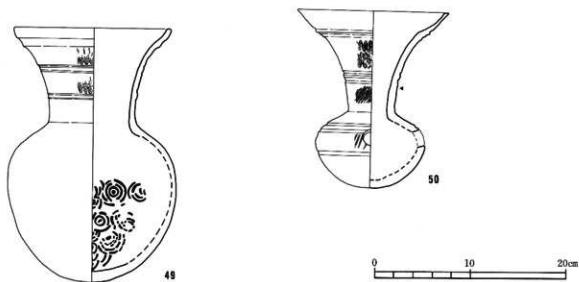
$\diagup \dot{M}^1 \circ \triangle \circ \triangle I^1 I^1 \diagdown$	$\diagup \dot{I}^1 \dot{I}^1 \diagdown \diagdown \diagdown \dot{M}^1 \diagdown$
$\diagdown \diagdown \diagdown \diagdown \dot{I}_2 \dot{I}_1 \diagup$	$\diagdown \dot{I}_2 \diagdown \dot{P}_1 \dot{P}_2 \dot{M}_1 \diagdown \dot{M}_3$
(M ¹ はM ² の可能性あり)	
$\diagdown \diagdown \diagdown \diagdown \diagdown \diagdown \diagdown \diagdown$	$\diagdown \dot{C} \dot{P}^1 \diagdown \diagdown \diagdown$
$\diagdown \diagdown \dot{P}_2 \dot{P}_1 \diagdown \diagdown \diagdown \diagdown$	$\diagdown \dot{C} \dot{P}_1 \dot{P}_2 \diagdown \diagdown$

○ 歯槽開放 △ 歯根のみ ・ 遊離歯 / 破損・不明





第180图 29号横穴墓出土遗物实测图(2)



第181図 29号横穴墓出土遺物実測図(3)



179図-19

179図-27

179図-24

181図-50

第65表 29号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	ヘラ記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
1	有蓋高坏	・14 ・19 ・16.7	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。坏部はやや深い。脚部は下外方にのび端部は面をなす。二段三方スカシあり。外面中央部に2本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ 後回転ナデ	灰色	1-4mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
2	罎	・15 ・16.8 ・11.3	口頸部は外反しながらのび、端部付近でさらに屈曲し、その外面は凹面をなす。端部は丸い。胴部はだ円形を呈し中央部に穿孔あり。底部は平ら。	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	青灰色 灰色	1-3mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
3	坏身	・13.4 ・4.1 ・15.6	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 茶灰色	角閃石 白色砂粒を含む	良好		
4	罎	・口縁部欠損 ・14.2+α ・9.3	口頸部は外反しながらのび、端部付近で屈曲する。胴部はだ円形を呈し中央部に穿孔あり。底部は平ら。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	青灰色	1-3mmの石英粒を多量に含む	良好		
5	坏蓋	・14.2 ・3.4 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。 天井部は低く平ら。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラ切り	灰色	1mm大の石英、角閃石粒を多量に含む。 精緻	良好 堅緻		
6	坏蓋	・14.7 ・4.3 ・-	口縁部は外反しながらほぼ直下へのび、端部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	灰白色 青灰色	石英、角閃石粒を多量に含む 粗	不良		
7	坏蓋	・13.7 ・3.9 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。 天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 調整ナデ	灰色 青灰色	1-2mm大の石英粒を含む 精緻	良好 堅緻		
8	坏蓋	・15.2 ・4.4 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。 天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、角閃石粒を含む やや粗	やや不良		
9	坏蓋	・14 ・4.2 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。 天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-3mmの石英粒を含む 精緻	良好		
10	坏蓋	・13.5 ・4.4 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は、細くなり丸い。天井部はやや高く平ら。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ ヘラ切り後ナデ	灰色 青灰色	石英、黒色砂粒を少量含む 精緻	良好 堅緻		

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
11	直口 壺	・欠損 ・14+α ・12.5	口縁部は外反しながらのびる。胴部は円形を呈し、外面の肩部に2本の沈線あり。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1-4mmの石英、白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
12	坏 蓋	・14.7 ・3.9 ・-	口縁部は外反しながらのび、肩部は細くなりすく内傾する段を有す。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1mm大の角閃石、2-3mm大の石英粒を含む	良好 堅緻		
13	坏 蓋	・13.1 ・4.2 ・-	口縁部は外反しながらばは直下にのび、肩部は内傾する段を有す。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明灰色	石英、黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
14	坏 蓋	・15.1 ・4.4 ・-	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2mm大の石英粒を微量含む 精緻	良好 堅緻		
15	坏 蓋	・14.6 ・4.2 ・-	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
16	坏 身	・12 ・3.8 ・14.7	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は肥厚しながら水平にのび、肩部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 黒色	石英、黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
17	坏 身	・12.1 ・3.8 ・14.6	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は上外方にのび、肩部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色 青灰色	1-2mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
18	坏 身	・12.4 ・4 ・14.6	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は肥厚しながら水平にのび、肩部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-3mmの石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
19	坏 蓋	・14.4 ・3.8 ・-	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-2mm大の石英と黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		外面天井部「1」
20	坏 蓋	・13.4 ・3.5+α ・-	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸い。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
21	坏 蓋	・14.3 ・3.9 ・-	口縁部は外反しながらのび、肩部は丸い。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-3mm大の石英粒を多量に含む	良好 やや堅緻		
22	坏 身	・13.4 ・3.8+α ・15.4	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は水平にのび、肩部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰茶褐色	角閃石、白色砂粒を少量含む	良好		

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
23	坏 身	・12.7 ・4.4+ α ・15.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび端部は丸い。 底部はやや浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ へう切り履 し後ナデ	淡青灰色	精緻	やや良 好 やや堅 緻		
24	坏 身	・11 ・4.2 ・13.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は水平にのび端部は丸い。 底部はやや浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黒色 青灰色	1~2mmの 石英粒を含 むが精緻	良好 堅緻		内面底部 「×」
25	坏 身	・11.9 ・3.8 ・14.1	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰色	1mm大の石 英粒を含む が精緻	良好 堅緻		
26	坏 身	・12.5 ・4.1 ・14.6	たちあがりは内傾してのび端部は丸い。 受部は水平にのび、端部に坏蓋を重ね焼きした痕跡あり。底部は、やや深く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黒色 灰色	石英、黒色 砂粒を含む	良好 堅緻		
27	坏 身	・12.6 ・3.2 ・15	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は、短く水平にのび端部は丸い。 底部は、浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、黒色 砂粒を含む が精緻	良好 堅緻		外面天井部 「 」
28	坏 身	・12.3 ・4.2+ α ・14.3	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は、深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 堅緻		
29	坏 身	・13.5 ・4 ・15.6	たちあがりは内傾してのび端部は丸い。 受部は、上外方にのび端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 茶灰色	角閃石、白 色砂粒を少 量含む	良好		
30	坏 身	・13.4 ・4.2 ・15.1	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。 受部は、上外方にのび端部は丸い。 底部は、浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1~2mmの 石英粒を多 量に含む	良好 堅緻		
31	坏 蓋	・15.2 ・5.3 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く、外側にやや外反する。天井部は、高く丸みをおび、外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色、黒色	1~3mmの 石英粒を多 量に含む	良好 堅緻		
32	坏 蓋	・14.8 ・4.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや低く平ら。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰色	白色砂粒を 多量に含む	やや良 好 やや軟 質		
33	坏 蓋	・15.6 ・5.2 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く、内傾する段を有す。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ヘラケズリ	赤灰色	2mm大の石 英粒を含む が精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
34	坏蓋	・15.2 ・5.3 ・一	口縁部は外反しならのび、端部は丸く、内・外面に段をなす。天井部は、高く頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1~3mmの石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
35	坏蓋	・14.8 ・5.7 ・一	口縁部は外反しならのび、端部は丸く、内面に一本のうすい沈線を描す。天井部は、やや高く平ら。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1~2mmの石英粒を多量に含む	やや良好 やや堅緻		
36	坏蓋	・11.6 ・3.7 ・一	口縁部は外反しならのび、端部は丸く、内傾する面を有す。天井部は低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mm大の石英粒を含むが精緻	良好 やや堅緻		
37	有蓋高坏	・14.4 ・20.2 ・16.8	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。脚部は、下外方にのび端部は面をなす。外面中央部に2本の沈線あり。2段3方スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英、黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
38	有蓋高坏	・14.2 ・18 ・4.5	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は細くなりとなる。受部は、上外方にのび端部は丸い。脚部は、下外方にのび端部は面をなす。外面中央部に2本の沈線あり。2段3方スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 青灰色	石英粒を少量含むが精緻	良好 堅緻		
39	有蓋高坏	・13.8 ・18.7 ・16.6	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。坏部は、やや深い。脚部は、下外方にのび、端部は面をなす。外面中央部に2本の沈線あり。2段3方スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後ナデ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
40	有蓋高坏	・14.6 ・19.2 ・17.2	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。脚部は、下外方にのび端部は外側に屈曲し、面をなす。外面中央部に2本の沈線あり。2段3方スカシあり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
41	有蓋高坏	・13.4 ・6.9+α ・15.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ後回転カキ目	青灰色	0.5~1.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
42	有蓋高坏	・15 ・5+α ・15.6	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび端部は丸い。坏部は、やや浅い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
43	有蓋高坏	・13 ・9.1 ・15.2	坏部のたらあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、短く水平にのび端部は丸い。脚部は、短く下方にのび、端部は肥厚し丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	角閃石、その他の砂粒をやや多量に含む	良好		
44	高坏	・11.2 ・7.5+ -	坏部の口縁部は外反しなからのび、端部は、内傾する面を有す。外面には、稜がうすくみとめられる。脚部は、細いスカシがあるようだが、詳細はわからない。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色	0.5～1mmの白色砂粒を少量含む	不良		
45	横瓶	・8.4 ・22.8 ・22.8	口頸部は外反しなからのび、端部は肥厚し丸い。胴部は、だ円形を呈し、1側面は平らである。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
46	横瓶	・7.6 ・22.8 ・22.8	口頸部は外反しなからのび、端部は丸い。胴部は、だ円形を呈す。	回転ナデ	回転カキ目 回転ナデ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
47	高坏	- ・5.4+ -	坏部中に明瞭な稜を有す。	調整不明	調整不明	明褐色	石英粒を多量に含む	やや不良 やや軟質		
48	高坏	・10.8 (底径) ・7.2+ -	脚部は、下方にのび端部は、ほぼ水平にのび丸い。	ヘラケズリ	ヘラミガキ	明褐色	石英粒を含む	良好	土師器	
49	長頸壺	・16.8 ・26.7 ・17.9	口頸部は外反しなからのび、端部付近でさらに屈曲し、端部は面をなす。外面に4本の沈線あり。胴部は、ほぼ円形を呈し、底部は丸い。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 櫛歯波状文 平行タタキ 後、回転カキ目、荒い 回転カキ目	灰色	石英粒が微量含まれるが精緻	やや良好 やや堅緻	土師器	
50	甗	・15.9 ・18.9 ・11.5	口頸部は外反しなからのび、端部付近でさらに外反し、その外側にうすい突帯がつく。外面は、丸く内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 櫛歯波状文 櫛歯文、ナデ 調整ナデ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		外面胴部「1」

第66表 29号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頸部長(刃部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
51	鉄鏃	9.9	4.3	2.5	0.7	0.1	0.2	
52	同上	4.3以上	2.6	1.6	0.7	0.1	0.2	
53	同上	4.9以上	2.0	1.6	0.7	0.15	0.15	
54	鏃	3.5以上	-	2.5	-	0.3	-	一部分のみ残存
55	刀子	7.1以上	3.4以上	1.0	不明	0.2	不明	

30号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

30号横穴墓は北支群中央の斜面にあり、南西方向に開口する。標高は約32.3mである。全長は4.7mを測り、その保存状態は良好であった。主軸はN-70.5°-Eにとる。斜面の遺溝検出作業中に本横穴墓の供献土器が現れ、発見の契機となった。調査前には横穴墓の存在を示すような前庭部の落ち込み、玄室天井部の陥没などの様相は認められなかった。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の確認、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設の除去後、埋葬人骨の遺存が確認されたため、玄室内の調査を一旦中断した。数日後、九州大学医学部第2解剖学教室室員の参加協力の上で改めて玄室内の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ約2.2m、幅約1.6mであり、ほぼ長方形の様相を呈している。前庭部の斜面下方は旧地表と推定される黒褐色の風化土層であり、前庭部掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。前庭部床面はゆるい凹凸があり、羨門部に向っての傾斜はほとんどみられない。床面は羨門部前面の0.4m付近で約15°の傾斜で下降し羨門部に達する。羨道側壁の傾斜は両者ともほぼ同様で75°~78°を測る。また羨門部壁の傾斜は約75°を測る。

羨門部分は特に天井部分と左側壁部分において崩壊が著しく、旧状を損なっている。側壁下部が一部残存しており、また閉塞施設との関係から復元すると、羨門部は高さ0.56m・幅0.62m前後と推定される。

閉塞施設は、板石と河原円礫を使用し、入念に構築されている。前庭部の下部に最大10cmの埋土を行い、閉塞の基底部を整えている。閉塞の配石は形状と使用部位によって次の3群に分けられる。第1群は大形の安山岩板石を1枚、平坦面を上にして先の埋土の上に敷き、その上に安山岩板石を5枚使用して、羨門部を覆う。第2群は平坦な河原円礫多数からなり、第1群を支え、隙間を覆う。第3群は河原円礫10数個からなり、前庭部左方向に位置する。第3群は追葬時にかたづけられものと考えられる。以上の配石によって面積、堆積共におおよそ前庭部の半分が埋まる。この配石の後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

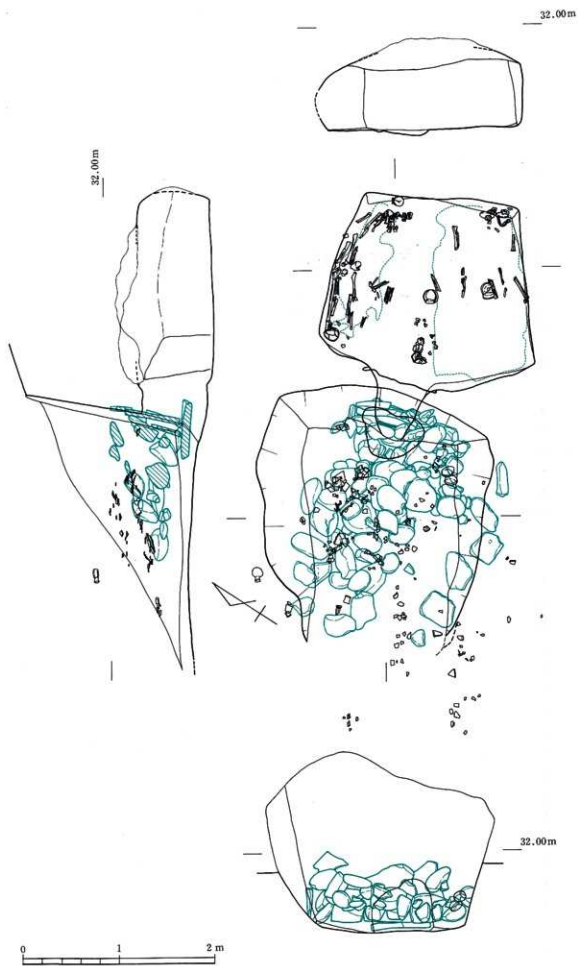
b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で4層群7層に分層した。以下堆積順に説明を加える。

第1層群 (VI-VII層) は、前庭部全体に堆積した基盤層の二次堆積物であり30cm前後堆積し、閉塞付近は上層群によってカットされている。本層群はその風化度合によって2層に分離され、上層の風化は著しい。上層は須恵器を包含する。本層群は初葬埋土と考えられる。

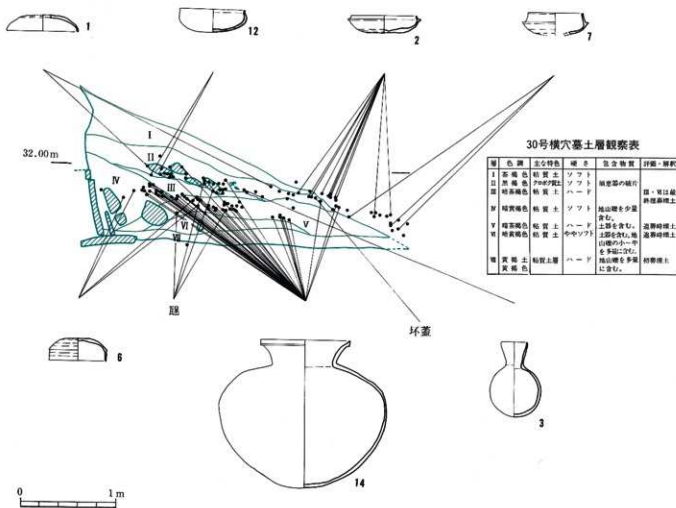
第2層群 (V層) は、前庭部全体に堆積し、最も厚い所で30cmを測る。閉塞付近の上面を上層群によってカットされている。風化が著しく、須恵器壺、坏等の破砕散布が認められる。壺は上層群包含のものと接合することから追葬時の攪乱が考えられる。本層群は第一次追葬埋土と推定する。

第3層群 (II-IV層) は、閉塞部から前庭部全体に堆積し、最も厚い所で70cmを測る。本層群は3層に分けられる。下層から(1)IV層は閉塞部の埋土できめ細かな層で締っている。若干風化する。(2)III層は基盤層の二次堆積で風化は進んでない。(3)II層は(2)の風化土層で著しく風化が進んでいる。本層群中には須恵器坏、提瓶、甕等の散布が見られ、II層上面で型式的に新しい土器が出土している所から埋葬に伴わない祭祀儀礼があったと推定される。本層群は、最終埋葬の埋土と考えられる。

第4層群は、近年の造成による二次堆積土である。以上の観察結果から、本横穴墓においては少なくとも3度の埋葬と埋葬に伴わない祭祀儀礼が行われたと推定される。なお、人骨は4体出土しているところから、第1層群形成時に2回の埋葬が行われたとも考えられるが明確にできなかった。



第183图 30号横穴墓平·断面图



第184図 30号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅0.62m、長さ0.56mを測る。床面は8°前後の緩い傾斜で玄室に向かって下降し、玄室との接続部分で最深となる。天井部は崩落によって不明であるが約15°の傾斜で下降すると推定される。

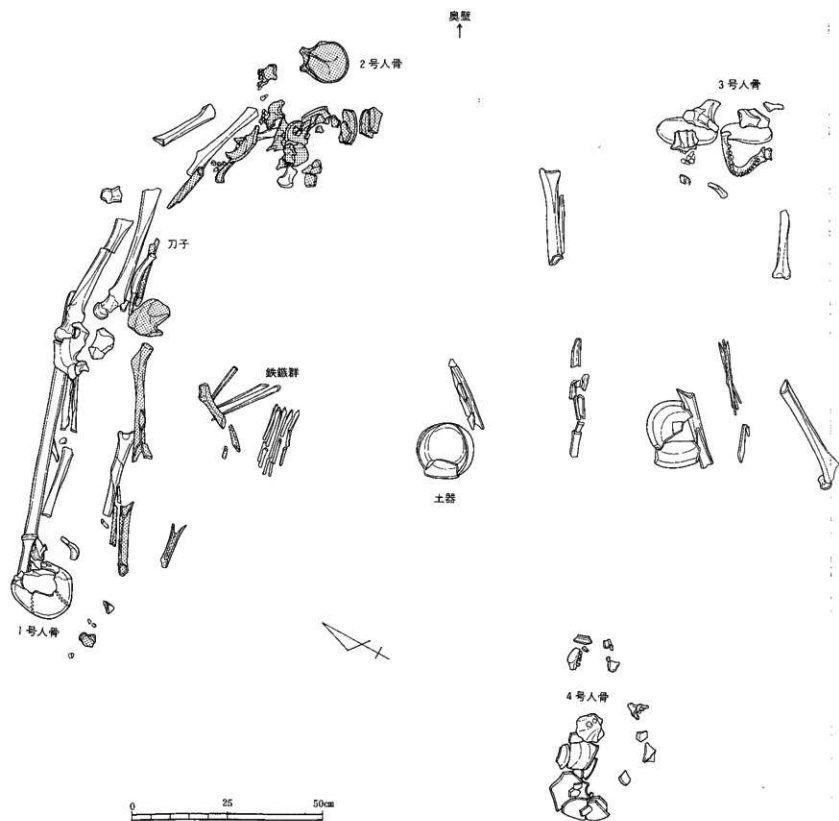
玄室はドーム形、略方形を呈し、長さ1.93m、幅2.3mを測る。高さは天井部の崩落のために明確ではないが、約0.7mと推定される。床面は標高30.85mでほぼ平坦である。玄室左方向には長さ1.4m、幅0.4m、右方向には長さ1.8m、幅1.0mの範囲で直径5cm以下の河原円礫を散布し、礫床としている。なお右礫床の東側には直径15~20cmの河原円礫2個があり、左礫床の東側にも直径5~10cmの河原円礫3個があり、石枕とした可能性がある。

(友岡信彦)

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 玄室の長軸と並行して4体が埋葬されていた。1号人骨は、成年から熟年にかけての男性で、羨門からみて左側に位置する。ほぼ全身の骨格が遺存しているが、頭と左寛骨・大腿骨は副葬の直刀上にのり、上・下肢や寛骨は左右が異常に近接している。この状態は明らかに原位置を動かされたものであり、本来は、先端を奥壁側に向けた鉄鍬群と直刀との間に葬られたものと考えられる。



第185图 30号横穴墓女室内人骨出土状态

2号人骨は、1号人骨とは差し違えて、奥壁側に頭位をとって葬られた若年の個体である。頭は1号人骨の右腓骨と足根骨上に、右上腕骨は1号の右脛骨上、右大腿骨は1号の右上腕骨上にそれぞれの骨の骨端に接しており、左大腿骨も1号人骨副葬の鉄鎌上に位置している。しかし、2号人骨の頭・四肢骨の位置関係をみると、体軸が大きく曲がった状態であり、左大腿骨は反転して2号も原位置を動かされているとみなされる。したがって、これらの所見から、2号人骨は1号人骨の後に埋葬されたものであり、その埋葬の際に1号人骨を側壁の方へと押しやったものと考えられる。また、1号人骨大腿骨と2号人骨右前腕との間にある刀子は、位置関係からみて2号人骨に副葬された可能性が高い。

3号人骨は、玄室右側に奥壁に頭を向けて葬られていた成年女性である。頭は石枕上に置かれるが、落石によって破損する。残存した人骨の位置関係には大きな乱れはないが、左大腿骨は反転し、やや動いている。これは、落石によるものとも考えられるが、後述する4号人骨埋葬時に動かされた可能性もある。また、右大腿骨上には土師器碗が副葬される。

4号人骨は、3号人骨と差し違えて頭位をとって埋葬される。男性と思われる熟年の被葬者で、3号人骨の股間に相当する部分に、先端を奥壁に向けた鉄鎌群が副葬される。また、左大腿骨のわきには土師器碗が置かれていた。頭は落石のため破損するが、遺存した左右大腿骨や右脛骨・腓骨の位置関係に乱れはない。さらに、4号人骨は、人骨と礎床との間に1~2cmかそれ以上の土が認められ、副葬の鉄鎌・土師器碗についても同様であった。この点は、1~3号人骨とそれぞれの副葬品が礎床にじかに接していることと対照的である。したがって、羨門・通路への近さとこの所見とから、4号人骨は、3号人骨埋葬後、ある程度土砂が流入もしくは落下して堆積した後を追葬されたものと考えられる。

このように、30号横穴墓における埋葬は、1号人骨が初葬である。3号人骨→4号人骨という順序も明らかである。2号人骨と3号人骨・4号人骨との先後関係については、2号人骨を二次的に動かす必要は、4号人骨追葬の時をおいてないと考えられることから、少なくとも2号→4号という順位は明らかである。そして、4号人骨副葬の土師器碗は3号人骨のそれと同一型式であることを考えれば、2号人骨が3号人骨よりも先行することになる。したがって、1号→2号→3号→4号という埋葬順位が推定される。(田中良之)

b) 副葬品 玄室内には左礎床上に1・2号人骨、右礎床上に3・4号人骨が遺存していた。左礎床上には2号人骨の大腿骨付近に鉄鎌A群が先端を東向きにして5点、鉄鎌B群が先端を南向きにして3点配置されていた。B群は本来先端を東に向けていたものと思われる。さらに2号人骨の左前腕上に先端を西向きにして、鹿角装刀子1点が配置されていた。右礎床上には3号人骨の左右大腿骨の間に、鉄鎌C群が先端を東向きにして6点が、刀子が1点配置されていた。3号右大腿骨に立てかけるように土師器碗が1点、4号左大腿骨のそばに土師器碗が1点それぞれ配置されていた。

遺物と人骨の関係であるが、A・B両群の鉄鎌は先端を東向きに、すなわち足方に向けて配置されていたと推定されることより、1号人骨に伴うものと思われる。2号人骨上の鹿角装刀子は先端を西向きに、さらに2号人骨上に位置することから、2号人骨に伴うものと思われる。鉄鎌C群と刀子は、鉄鎌群の先端が東向きに、さらには3号人骨の腹部付近に位置することから考えて4号人骨に伴うものと思われる。3・4号人骨の上下関係であるが、4号人骨は礎床上にある程度落石等の埋土をかぶった後で葬られた事実より考えていくと、3号右大腿骨上の土師器碗は底部と礎床間に埋土が介在せず、大腿骨にたてかけるように配置されていたことより、3号人骨に伴うものと思われる。しかし4号人骨に伴う可能性もないわけではない。4号人骨そばの土師器碗は底部と礎床間に埋土が介在していることより4号人骨に伴うものと思われる。

2) 前庭部内

前庭部埋土の下部で土師器を配列埋置状態で検出した。これは最終追葬時の遺物で、第IV層下面に位置し標高は31.5m前後を測る。坑2個体(第186図15・16)で、羨門に向かって右側の閉塞石上に埋置されていた。埋土内からは坑(第186図11~13)が検出された。須恵器は埋土内のほぼ全面から破砕散布された状態で検出した。坏蓋5(第186図1・4~6・8)・坏身3(第186図2・7・9)・提瓶(第186図3)・坑口緑部(第186図10)・

壺(第186図14)である。(友岡信彦)

4. 30号横穴墓出土人骨の所見

成人3体、若年1体、計4体の人骨が検出された。

30-1号人骨(男性・成年~熟年)

〈保存部位〉

頭蓋骨: 脳頭蓋以外はほとんど消失している。歯牙も検出できなかった。赤色顔料の付着が認められる。

体部骨: 左右上腕骨片、左橈骨体片、左尺骨体片、左右寛骨片、左右大腿骨、左右脛骨片、腓骨片。

〈性別・年齢の推定〉

性別: 乳様突起の発達が良好であり、大坐骨切痕の角度が小さく寛骨も男性の特徴を示している。以上から、本人骨は男性と推定した。

年齢: 頭蓋主縫合の内板は閉鎖し、外板は開離している。したがって、それ程高齢とは思われないが、成年~熟年程度の年齢と推定しておきたい。

〈形質〉

頭型は中頭型(M 8 / 1 = 78.5)である。顔面部の特徴や身長等は不明である。頭蓋非計測的形質では、上矢状溝左傾が認められた。

30-2号人骨(不明・若年)

〈保存部位〉

頭蓋骨: 左側頭部から後頭部を欠いているが、顔面部は比較的良く残っている。残存歯牙は以下のとおりである。

○	M ²	M ¹	P ²	P ¹	○	○	○	○	○	I ¹	I ²	C	○	P ²	M ¹	M ²	○
(M ₃)	M ₂	M ₁	P ₂	○	△	○	○	○	○	○	○	C	○	○	M ₁	M ₂	(M ₃)

○ 歯槽開放 △ 歯根のみ () 未萌出

体部骨: 上腕骨片、右橈骨片、右寛骨片、左右大腿骨、左右脛骨片。

〈性別・年齢の推定〉

性別: 未成人であるため、推定は困難であるが、頭蓋骨の形状はやや男性的であるように思われる。

性別: 第3大臼歯が未萌出であり、大腿骨と寛骨の骨端部もはずれていることから、若年と推定した。

〈形質〉

詳細は不明である。

30-3号人骨(女性・成年)

〈保存部位〉

頭蓋骨: 保存状態が悪く、右側頭骨、下顎骨のみである。赤色顔料の付着がみられる。残存歯を以下に示す。

/	/	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	/	/	/	P ¹	P ²	M ¹	/	/
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

/ 破損・不明

体部骨: 左上腕骨体部、左右大腿骨体部、左脛骨体部。

〈性別・年齢の推定〉

性別: 下顎骨はかなり頑丈であるが、乳様突起の発達が弱く、四肢骨も細いことから女性と推定した。

年齢: 歯牙咬耗度が Broca の 1~2 度であることから成年と推定した。

〈形質〉

保存状態が悪く、変形しているために計測はできなかった。頭蓋非計測形質では下顎隆起と外耳道骨腫（右）が認められた。

30-4号人骨（男性・熟年）

〈保存部位〉

頭蓋骨：保存状態は悪く、右頭頂部から後頭部にかけての頭蓋冠片、上顎骨片、歯牙が残存しているだけである。残存歯の歯式を以下に示す。

/ / / ○ ○ C ○ ○	○ × C P ¹ P ² / / /
/ M ₂ M ₁ P ₂ / Ċ / / /	/ / / / / / / / /

× 歯槽閉鎖 ○ 歯槽開放 ・ 遊離歯 / 破損・不明

体部骨：左右大腿骨片、近位部を欠く右脛骨、左脛骨片。軀幹骨は消失している。

〈性別・年齢の推定〉

性別：後頭骨の外後頭隆起が良く発達しており、骨質も頑丈であることから男性と推定した。

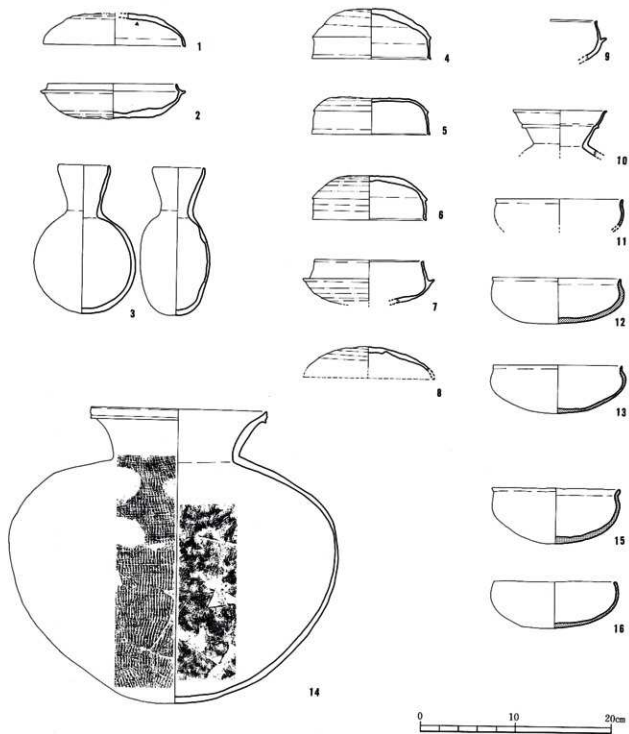
年齢：歯牙の咬耗度（Brocaの2度）から熟年と推定した。

〈形質〉

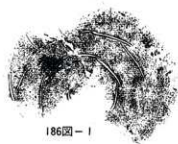
頭蓋非計測的形質の観察で、1号人骨に見られた上矢状洞溝左傾が認められた。その他の形質は不明である。

〈特記事項〉

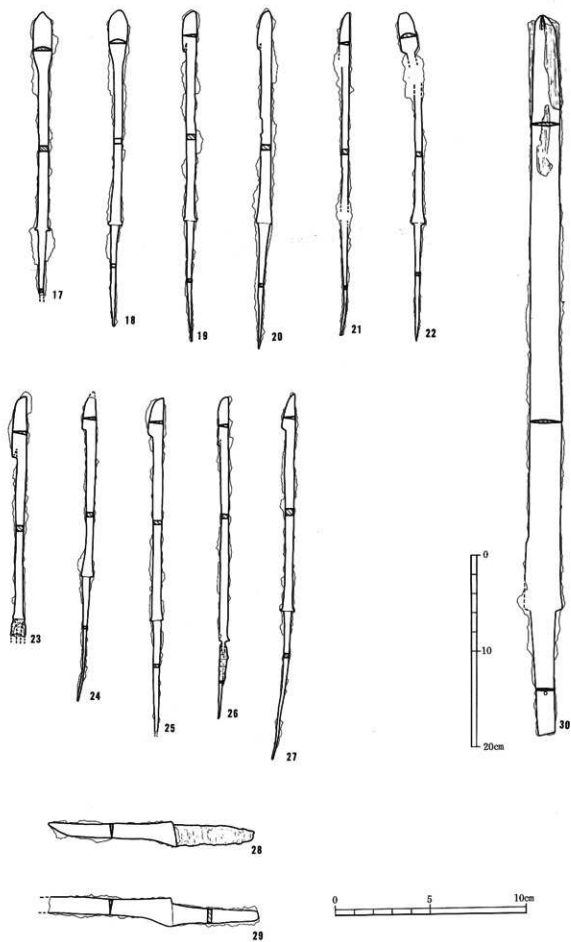
本人骨の左上顎側切歯は抜去されている。その原因については、いくつかの可能性が考えられる。第一は外傷によって失われた可能性がある。外傷の場合は複数の前歯が損傷を受ける例が多いという報告があるが、1本の場合も可能性を否定することはできないだろう。第二は歯周症等の病気によって失われた可能性がある。本例の抜去痕にも炎症の治癒した形跡を示す所見が見られるが、抜去時期との関係については決め難い。また、隣接歯槽骨には歯周症は見られない。第三は先天性欠如の可能性もある。これについては、反対側の歯槽骨を見ると歯根はしっかりしており、上顎側切歯が退化傾向を示しているようには思えない。第四は風習的抜歯の可能性である。古墳人の抜歯例は他の遺跡においても認められ、また前田山遺跡ですでに可能性が指摘されていることから、本例の場合は風習的抜歯の可能性があると指摘しておきたい。（土肥直美）



第186図 30号横穴墓出土遺物実測図(1)



第187図 30号横穴墓出土土器ヘラ記号



第188图 30号横穴墓出土物尖刃图(2)

第67表 30号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
1	坏蓋	・15 ・3.3 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は、やや肥厚し丸い。天井部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 目転ヘラナズリ	淡青灰色 灰黒色	精緻	良好 堅緻		内面天井部 [印]
2	坏身	・13.7 ・3.6 ・15.3	口縁部はやや短く内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は、浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 目転ヘラナズリ	灰黒色	石英粒などの砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
3	提瓶	・5.2 ・15.5 ・10.7	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。 胴部は、円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 目転ヘラナズリ	灰褐色 淡褐色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
4	坏蓋	・12.6 ・5.2 ・一	口縁部はほぼ直下にのび、端部は内傾する段を有す。外面には、ややはっきりした稜をなす。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 目転ヘラナズリ	淡青灰色 灰色	精緻	良好 堅緻		
5	坏蓋	・12.4 ・3.7 ・一	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部は内傾する段を有す。外面は、はっきりした稜がみられる。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	青灰色	精緻	良好		
6	坏蓋	・12 ・4.7 ・一	口縁部は直下にのび、端部は、内傾する面をなす。外面には、はっきりした稜がみられる。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
7	坏身	・11.5 ・4.5+α ・13.8	たちあがりは内傾してのび、端部は、内傾する段を有す。受部は、上外方にのび端部は、とがりがみで丸い。底部は、低くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 目転ヘラナズリ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻	反転復元	
8	坏蓋	・一 ・2.4+α ・一	天井部は、低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 目転ヘラナズリ	青灰色 灰黒色	2~3mm大の石英粒を多量に含む	良好 堅緻	口縁部欠損	
9	坏身	・一 ・一 ・一	たちあがりは内傾してのび、端部は、内傾する面をなす。受部は、上外方にのび端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 目転ヘラナズリ	暗青灰色	石英粒を微量含むが精緻	良好 堅緻		
10	甕	・9.8 ・5+α ・一	口頸部は外反しながらのび、まん中で、わずかに外反し、その外面に一本の突起がつく。端部は、内傾する段を有す。	回転ナデ	回転ナデ 帯描流状文	灰色	石英、その他の砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
11	埴	・13.6 ・2.6+α ・13.8	口縁部は内湾しながらのび、端部は、わずかに外反し丸い。	調整不明	調整不明	赤褐色	石英、雲母粒を含む	良好	反転復元 (底部欠損) 土師器	
12	埴	・14.7 ・4.8 ・14.2	口縁部は内湾しながらのび、端部は外反し丸い。底部は、浅く平らである。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐色	石英、雲母粒を含む	良好 堅緻	土師器	
13	埴	・一 ・一 ・一	口頸部は内湾しながらのび、端部は、わずかに外反し丸い。	調整不明	調整不明	淡褐色	石英粒を含む	やや不良	土師器	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
14	壺	・18.1 ・30.5 ・33.7	口縁部は外反しなごらのび、端部は面をなし、その下方に一本の沈線をなす。胴部は、よくはり最大径は、上方にある。底部は、とがりさみで丸みをおびる。	回転ナデ 同心内のタタキをナデ消している	回転ナデ 櫛掻波状文 タテ方向の 平行タタキ 後回転カキ目	青灰色 黒灰色	精緻	良好 堅緻		
15	碗	・13.8 ・5.9 -	口縁部は内湾しなごらのび、端部は、外反し丸い。底部は、深く丸みをおびる。	ヨコナデ 調整ナデ	ヨコナデ ヘラミガキ	赤褐色	石英、雲母 粒を含む	良好 堅緻	土師器	
16	碗	・13.1 ・4.9 -	口縁部は内湾しなごらのび、端部は丸く、やや肥厚する。底部は、やや深く丸みをおびる。	ヨコナデ 調整ナデ	ヨコナデ ヘラミガキ	赤褐色	石英、雲母 粒を含む	良好 堅緻	土師器	

第68表 30号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頸部長 (刃部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
17	鉄鏃	14.8以上	2.8	0.9	0.5	0.2	0.3	木質残存
18	同上	16.6	2.0	1.0	0.5	0.2	0.3	
19	同上	17.4	2.1	0.7	0.5	0.1	0.3	
20	同上	17.8	2.1	0.7	0.5	不明	0.3	木質残存
21	同上	17.0	不明	0.5	0.4	0.15	0.25	
22	同上	17.3	2.0	0.9	0.3	0.2	0.25	
23	同上	12.6以上	3.2	0.8	0.5	0.2	0.3	板歯皮巻残存
24	同上	15.9	1.7	0.7	0.4	0.2	0.25	
25	同上	17.5	1.9	0.8	0.4	0.2	0.25	
26	同上	16.9	2.5	0.6	0.4	0.2	0.25	
27	同上	19.2	1.9	0.7	0.5	0.15	0.35	
28	刀子	10.8	6.7	0.9	0.7	0.1	0.1	木質柄残存
29	同上	11.0以上	6.5以上	0.9	0.8	0.2	0.25	
30	鉄剣	76.0	63.4	1.5	1.2	0.25	0.2	木質鞘残存、目釘穴1個

31号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

31号横穴墓は北支群のほぼ中央寄りに立地し、南西方向に開口する。全長は約9.5mで標高は34.4mである。主軸方向はN-46.5°-Eを測る。35-39号横穴墓の立地する一帯は斜面のほぼ半分が後世の削平により平坦に整形されているため、この31号横穴墓も保存状態は良くなかった。本横穴墓はこの平坦部の遺構検出作業中に、玄室天井部が削平、崩落した状態で検出され、さらに墓道埋土及び供献土器群が検出されたことにより、横穴墓の存在が確認された。調査は前庭部の供献土器群の検出作業を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等への埋土除去作業を行い、遺物、礎床施設等の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約6.8m、幅約1.2mの残存状況である。上場と床面の比高差は最大で0.7mであり、その大半が削平を受けている。前庭部床面はゆるい凹凸があり、羨門部全面から約10-18°の傾斜で裾部に向かって下降している。全面には玄室→羨道部から延びた1条の排水溝が検出された。側壁の傾斜は両者に差異があり、55-60°を測る。

羨門部分は天井部分の削平と側壁部分の削平・崩落のために旧状を大きく損なっている。側壁立ち上がり部分で測ると幅は約0.45mである。

閉塞施設は板石・河原円礫を使用しているが、施設は簡単に構築されている。まず安山岩板石を1枚前庭部前面に敷いている。この板石は閉塞施設の根石とともに、玄室内から続く敷石の役目を兼ねていると思われる。この板石の上に3枚の安山岩板石を構築している。この板石群は羨門部を覆う役目は果たしていない。どちらかというと羨道の右端に押しつけられたような状態で検出された。これは追葬時の行為だと推定している。さらに板石周辺から6個の円礫を検出したが、この円礫は現存する板石を覆う形態はとっていない。初葬時にはこれらの板石・円礫とも羨門部を入念に覆っていた閉塞施設だと考えているが、何度目かの追葬時には、閉塞石を使用した閉塞施設構築は行われなかったと推定している。また墓道内埋土からは安山岩板石が1枚検出された。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は上面削平で残りが悪く、全体を把握できないが、現存で4層群10層に分層した。以下堆積順に説明を加える。

第1層群(Ⅰ-Ⅰ層)は墓道全面に堆積している。中央付近から羨門部にかけては追葬時の整地により上面を削平されているが、入口に近い部分は風化土層が幾分堆積している。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定している。

第2層群(Ⅲ-Ⅳ層)は下層を覆って堆積している。中央付近から入口にかけては削平されており現存しない。本層は風化現象がみられる。2度目の埋葬行為時の墓道内埋土と推定している。

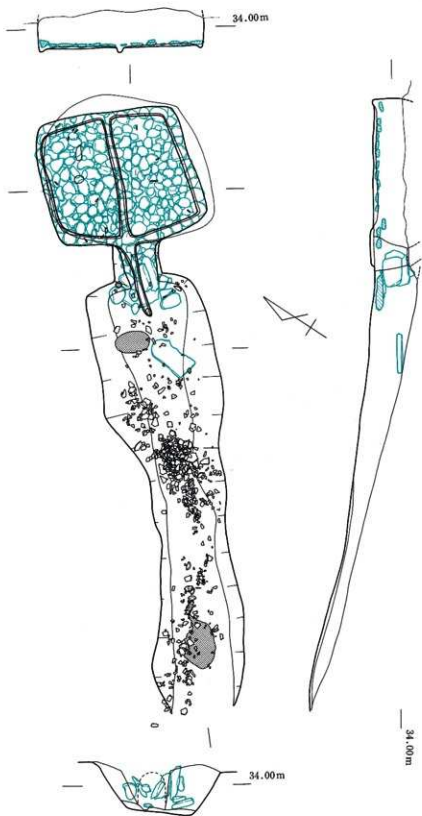
第3層群(Ⅰ-Ⅱ層)は第2層群と同様に裾部は削平されている。本層群は2層に細分されている。下層下面には土器片とともに閉塞施設に使用されたと思われる安山岩板石1枚を検出した。上層は風化現象がみられ、上層下面からは土器群が一括して検出された。本層群を3度目の埋葬行為に伴う墓道内埋土と推定している。

第4層群(Ⅴ-Ⅴ層)は後世の二次堆積土であり、本横穴墓の墓道内埋土ではないと推定している。

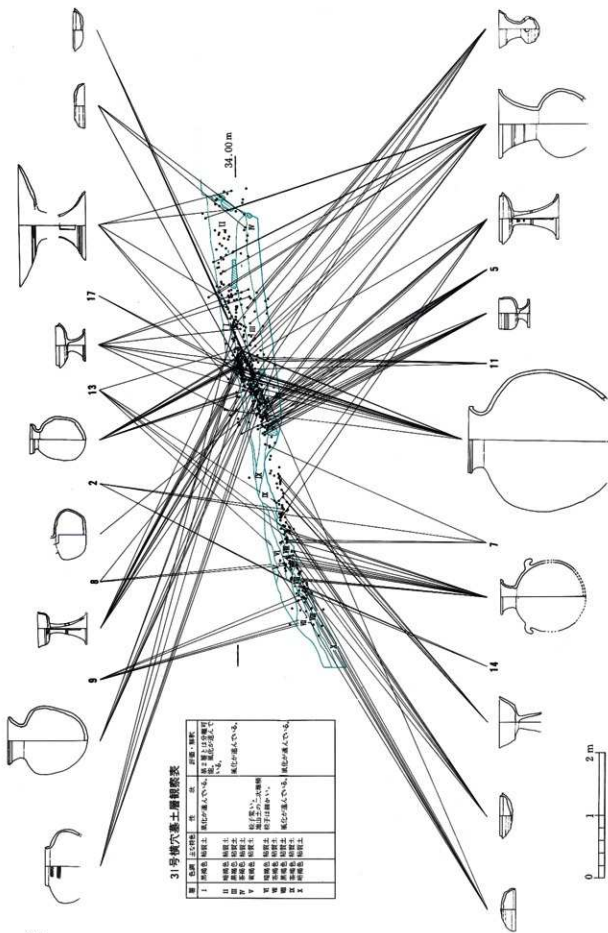
本横穴墓は残存部分においての土層観察の結果、少なくとも3度の埋葬行為が行われたであろうと推定している。

2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅約0.6m、長さ0.6mを測る。床面はほぼ平坦であり、中央部に玄室より続く1条の排水溝が走る。この排水溝は前庭部まで延びている。天井部は後世の削平により存在しない。玄室は床面から0.5m程度の



第189图 31号横穴墓平·断面图



第190図 31号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

残存状態のため高さ等は測定できない。長さ約2.2m、幅約2.4mで略方形の様相を示している。床面は全面に20cm前後の扁平河原円礫を敷きつめている。その隙間を補填するように小型の地山礫を配している。この状況は玄室内だけではなく、羨道内までみうけられる。最終床面は標高33.8m前後で推移し、ほぼ平坦に整形している。幅10～20cm前後の排水溝が、玄室壁に巡っており、さらに中央にも附設され、玄室入口付近で1条となり羨道から前庭部まで延びている。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内からは骨片、鉄製品、装身具等が検出された。骨片は玄室左半のほぼ中央部分で2ヶ所にわたり検出された。敷石上面に位置し、破片となっているため、部位は不明である。鉄製品は鉄鎌13、刀子1で玄室のほぼ全面から検出された。群をなすことなく、先端部も方向はまちまちである。追葬時及び落盤により現位置を保っていないと推定している。装身具としては耳環が1対玄室の右半奥壁寄りで検出された。これ以外には砥石、須恵器片が検出された。

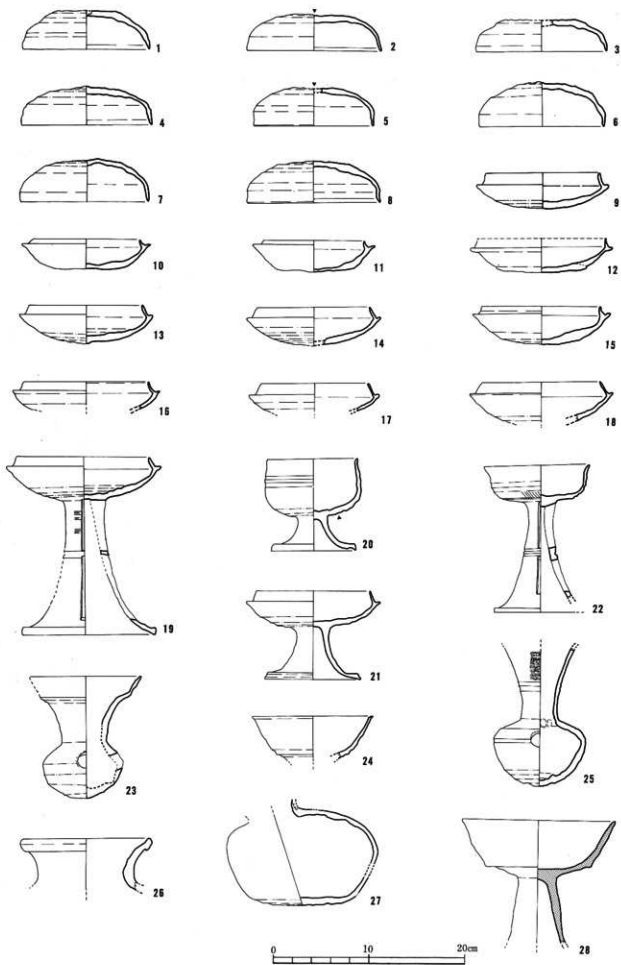
2) 墓道内

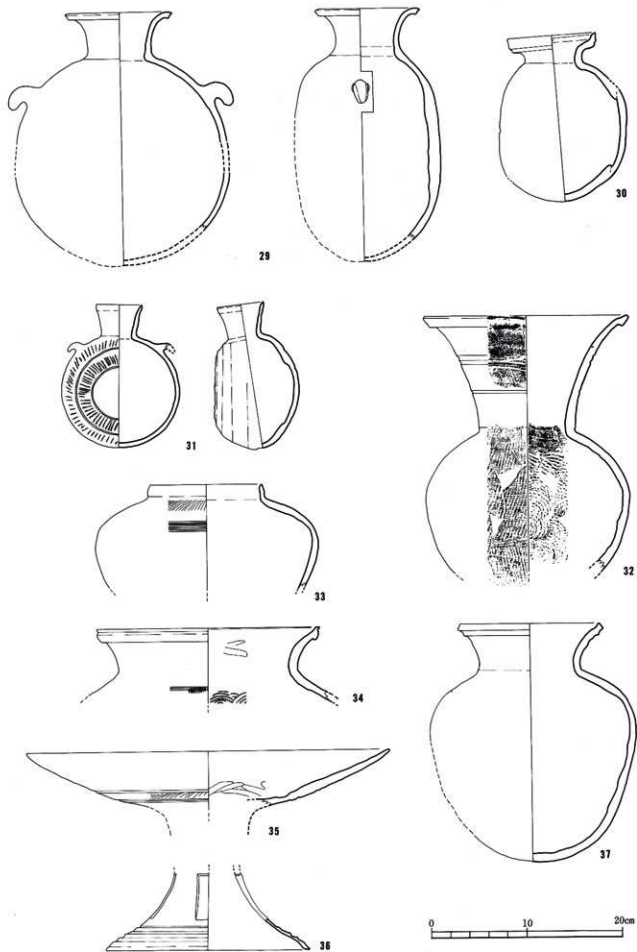
墓道内埋土の上層群からは遺物の破片等が多量に検出されたが、2ヶ所遺物の集中する地点がみられた。土層観察でみると、まずA群は第3層群下層に位置している。羨門部から約2.4～2.9m離れた範囲に検出された。標高は33.7m前後を測る。須恵器の高坏(第191図22)・坏(第191図5・10・11)のセットで“一括埋置”の状態に検出した。B群はA群同様に第3層群からの検出である。第3層群の上層に位置し、羨門部から約2.4m程度、入口方向である。標高は33.9m前後を測る。須恵器の甕(第193図38)と平瓶(第192図30)で“埋置”されたと考えられる状態に検出した。甕は故意に破砕されたと推定している。これらの群以外に羨門部壁と閉塞石の隙間から提瓶1個(第192図31)が検出された。検出状況、土層観察等からみて最終埋葬時の閉塞施設構築時に埋置したものと推定している。なお須恵器提瓶と長頸壺は29号横穴墓前庭部出土遺物と接合関係にある。

(友岡信彦)

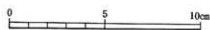
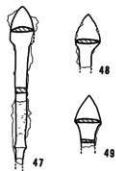
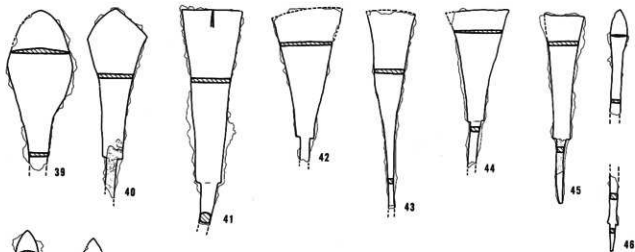
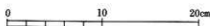
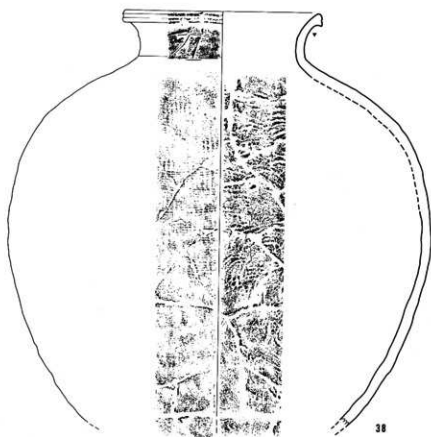
4. 31号横穴墓出土人骨の所見

保存状態が不良で、四肢骨細片が少量検出されただけである。四肢骨の中には大腿骨と思われる非常に厚く頑丈な骨片も混じっており、男性が葬られていた可能性があるが、詳細は不明である。(土肥直美)





第192图 31号横穴墓出土遗物实测图(2)



330

第193图 31号横穴墓出土物実測图(3)

第69表 31号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・13.3 ・4.1+ σ ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部はとがる。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	1mm大の内四角石粒を少量含むが精緻	良好 堅緻	31号墓道遺物と接合	
2	坏蓋	・14 ・3.8 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		外面天井部「1」
3	坏蓋	・13.7 ・3.3+ σ ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部はとがる。天井部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻	反転復元	
4	坏蓋	・13.6 ・4.1 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部はややとがる。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-2mmの石英粒を含むが精緻	良好 堅緻	31号墓道遺物と接合	
5	坏蓋	・12.4 ・3.9+ σ ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	精緻	良好 堅緻	反転復元	外面天井部「1」
6	坏蓋	・13.2 ・4.6 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-3mmの石英粒を多量に含む。	良好 堅緻		
7	坏蓋	・13.4 ・4.4 ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部はとがる。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	0.5-2mmの石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
8	坏蓋	・13.9 ・4.4 ・—	口縁部は外反しなごらほ直下にのび、端部は、内傾する面をなす。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	1-3mm大の石英粒を含む	良好 堅緻		
9	坏身	・11.8 ・3.7 ・13.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受け部は水平に伸び、端部は丸い。底部は浅く、やや丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、角閃石の砂粒を少量含む。	良好		
10	坏身	・11.2 ・3.1 ・13.5	たちあがりは短く内傾してのび、端部はとがる。受部は、わずかに上外方にのび端部は丸い。底部は、浅く平らである。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	1-3mmの黒色砂粒、白色砂粒を含む	良好 堅緻		
11	坏身	・10.4 ・3.3 ・12.8	たちあがりは短く内傾してのび、端部はとがる。受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り	灰白色	石英、角閃石粒を少量含む。	やや良好 堅緻		
12	坏身	・13.6復元径 ・3.5+ σ ・15	たちあがりは、内傾してのびる。受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は、浅く平ら。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ切り後ナデ	灰色	精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
13	坏身	・11.8 ・4.1 ・14	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、肥厚して水平にのび端部は丸い。底部は、浅く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、黒色砂粒を含み、やや粗い	良好堅緻		
14	坏身	・11.8 ・4+e ・14	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、黒色砂粒を含み、やや粗い	良好堅緻	反転復元	
15	坏身	・12.5 ・4 ・14.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は、やや深く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明灰色	石英粒を多量に含み、やや粗い	良好堅緻		
16	坏身	・13 ・3+e ・15.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	砂粒を多量に含む、やや粗い	良好堅緻	反転復元	
17	坏身	・11.3 ・2.9+e ・13.3	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、肥厚しながら水平にのび端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒を含むが精緻	良好堅緻		
18	坏身	・12.4 ・4.3 ・15.1	たちあがりは内傾してのび、端部はとがる。受部は、上外方にのび端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	精緻	良好堅緻	反転復元	
19	有蓋高坏	・13.8 ・18.5 ・16.2	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。坏部は、やや深い。脚部は、下外方にのび端部は、面をなす。長方形2段スカシあり。外面中央部に2本の沈線あり。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 後ナデ 脚部上方は、カキ目をナデ消している。	青灰色	石英粒を含む	0.5-1mmの白色砂粒を少量含む	良好	
20	脚付坏	・9.4 ・9.6 ・10	口縁部はわずかに内湾しながらのび、端部は細くなり丸い。坏部は、深く外面の中央より上部に2本の沈線を施す。脚部は、下外方にのび端部は、面をなす。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mmの石英粒を含むが精緻	やや良好堅緻		外面坏部底部「#1」
21	有蓋高坏	・11.9 ・9.2 ・14	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。坏部はやや浅い。脚部は、下外方にのび端部はゆるい凹面をなす。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡黄褐色赤褐色	精緻	やや不良		
22	高坏	・11.1 ・15.5 —	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には稜がみられる。脚部は、下外方にのび端部は、面をなす。長方形2段スカシがあり外面中央部に2本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 磨接列点文	青灰色	砂粒を含む	良好堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
23	甌	・11.6 ・12.9 ・8.4	口頸部は外反しなからのび、端部は丸く内傾する面を有す。胴部は、やや、だ円形を呈し底部は丸い。中央部より上方に穿孔あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 暗青灰色	0.5 - 3mm の石英粒を やや多量に 含む	良好		
24	甌	・12.8 ・4.5+ α ・-	口頸部は外反しなからのび、端部は面をなし丸い。外面の肩曲部は、突帯がつく。	回転ナデ	回転ナデ	灰黒色	細砂粒を少量含む	良好		
25	甌	・口縁部欠損 ・14.5+ α ・9.7	口頸部は外反しなからのび、外面中央部に2本の沈線あり。胴部はだ円形を呈し、外面上方に2ヶ所沈線あり。胴部上方に穿孔あり。底部は、丸みをおびる。	回転ナデ	櫛歯液状文 回転カキ目 回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色-青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
26	壺	・13.2 ・5.5+ α ・-	口頸部は外反しなからのび、端部は肥厚し段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	0.5 - 2mm の石英粒を 少量含むが 精緻	良好 堅緻	反転復元	
27	平瓶	・口縁部欠損 ・10.5+ α ・15.8	胴部は、だ円形を呈し最大径は、やや上方にある。底部は、平ら。外面肩部に浮文あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰白色	砂粒を多量に 含むみやや 粗い	やや良好 やや堅緻		
28	高坏	・16.1 ・13+ α ・-	坏部の口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。胴部は、下方にのびる。	器面が磨滅しているため調整不明	調整不明	黄褐色	石英粒を多量に含む	不良	土師器	
29	提瓶	・11.2 ・26.5 ・22+ α	口頸部は外反しなからのび、端部は面をなす。胴部は、円形を呈し外面両側にツノ状の把手がつく。	回転ナデ ヨコナデ	回転ナデ のち回転カキ目	灰色	2 - 5mm 大の石英粒を含む やや粗い	良好 堅緻		
30	平瓶	・9.2 ・17.4 ・13.3	口頸部は外反しなからのび、端部付近で屈曲しその外面に沈線をなす。端部は内傾する面をなす。胴部は、だ円形を呈す。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 調整ナデ	灰白色	0.5 - 1mm の石英粒を含むが精緻	やや良好 やや堅緻		
31	平瓶	・4.7 ・15.2 ・12.3	口頸部は外反しなからのび、端部は丸い。胴部は、円形を呈し、外面両側にツノ状の把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 櫛歯列点文 カキ目	灰色	0.5 - 2mm 大の石英粒を多量に 含むみやや粗い	良好 堅緻		
32	長頸壺	・21 ・27+ α ・21.6	口頸部は長く上外方にのび、端部は面をなす。外面には、2条の沈線、1条の沈線がある。胴部は、円形を呈す。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 液状文 タタキを施したあと 回転カキ目	青灰色、灰色	1 - 2mm 大の石英、白色砂粒を多量に含む	良好 堅緻		
33	短頸壺	・11.6 ・5+ α ・-	口頸部は短く直立してのび、端部は、とがりきみで丸い。	回転ナデ	回転ナデ タタキの後、 回転カキ目	灰色	0.5 - 2mm の石英粒を含む	良好 堅緻		
34	壺	・22.8 ・8+ α ・-	口頸部は外反しなからのび、端部は面をなし、面の上方は、凹面をなす。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ後、 回転カキ目	灰色	1 - 4mm 大の石英粒を含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
35	高坏	・37.6 ・5.9+ ・一	坏部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には2条の沈線が下部に2ヶ所施されている。	回転ナデ 静止ヘラケズリ	回転ナデ キザミ目	黒色、灰色	1~2mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
36	高坏	・21 (底径) ・8+ ・一	脚部は下方にのび、外面端部付近に4本の沈線あり。端部は、丸い長方形スカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	精緻	良好 堅緻		
37	壺	・14.8 ・25 ・21.8	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし外傾する面をなす。胴部の最大径は、上方にある。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	淡黄灰~灰色	微砂粒を含む	良好		
38	甕	・10.3 ・43.3 ・22.5	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなし、1本の沈線あり。胴部は、ほぼ円形を呈す。最大径は、中央部にあり。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキを施したあとカキ目	褐色、淡褐色	角閃石、石英、その他の砂粒を少量含む	不良		外面口頸部「X」

第70表 31号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頸部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
39	鉄鏃	8.4以上	5.7	3.3	1.3	0.3	0.2	
40	同上	9.9以上	7.9	3.0	0.5	0.25	不明	木質残存
41	同上	11.3以上	9.0	3.2	0.7	0.2	0.5	
42	同上	8.0以上	6.8	3.3	0.5	0.2	不明	
43	同上	10.4以上	5.3	2.5	0.8	0.25	0.3	
44	同上	8.1以上	5.8	2.7	0.5	0.2	0.3	
45	同上	9.9	6.5	1.7	0.4	0.2	0.3	
46	同上	9.5以上	2.2	0.9	0.5	0.1	0.2	
47	同上	8.2以上	1.9	1.2	0.6	0.3	0.3	
48	同上	2.8以上	1.7	1.3	0.6	0.25	不明	
49	同上	2.6以上	1.5	1.3	0.7	0.2	0.1	



191図-2



191図-5



193図-38



191図-20

第194図 31号横穴墓出土土器へら記号

32号横穴

1. 立地、調査前の状況

32号横穴墓は横穴群のほぼ中央の斜面にあり南西方向に開口する。全長は4.6mで、標高は前庭部で32.1mを測り、斜面下方に位置する。主軸方向はN-56.5°-Eを測る。調査前には、造成が行われ天井部が陥没し、基盤層が全面に入っていた為遺構検出が難しかった。また横穴墓上のテラス状遺構はすでに削平していたが、出土地点の検討から筆者等が1969年に造成中に発見した遺物が、当横穴墓のテラス状遺構出土のものと同定した。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落埋土等の除去作業を行い、遺物、礎床施設等の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ1.9m、幅は入口で約1.1m、羨門付近で約1.3mあり、ほぼ長方形の様相を示している。前庭部床面は入口付近が若干削平されているが、羨門方向へ約5°のゆるい傾斜で下降する。羨門より入口方向に0.4mの所で約10cm段落ちし羨門部に達する。

羨門部分は崩落が著しく、旧状を大きく損なっている。側壁下部が一部残存するのみで幅0.65mを測る。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、入念に構築している。まず、閉塞下部に約20cmの埋土を行い基底部を整えている。閉塞は次の5工程に分けられる。第1工程は幅1m、長さ1m、厚さ10cmの巨大な安山岩板石1枚で羨門を覆う。第2工程は平坦な人頭大の河原円礫12個前後で板石の最下面を支える。第3工程は先の工程を根石としてやや小形の河原円礫10個前後で第1工程の下面隙間を覆う。第4工程は第2～3工程を根石としてやや大形の河原円礫10個前後で板石の隙間を覆う。以上の配石によって前庭部の5分の1が埋まる。この配石後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

b) 前庭部内埋土 前庭部内埋土は3層群4層に分離できる。以下堆積順に説明する。

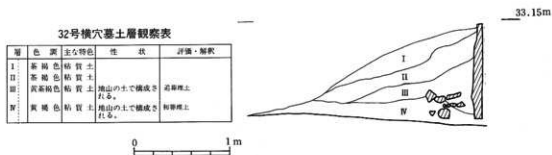
第1層群(Ⅳ層)は閉塞石下半部を覆い、前庭部全面にはほぼ水平に堆積し、最も厚い所で20cmを測る。閉塞部で上面を第2層群にカットされる。本層は初葬時の埋土と考えられる。

第2層群(Ⅲ層)は閉塞石中～下半部を覆い25°の角度で羨門付近より1.5mの範囲に堆積し最も厚い所で20cmを測る。閉塞部の土層切合状況から追葬時の埋土と考えられる。

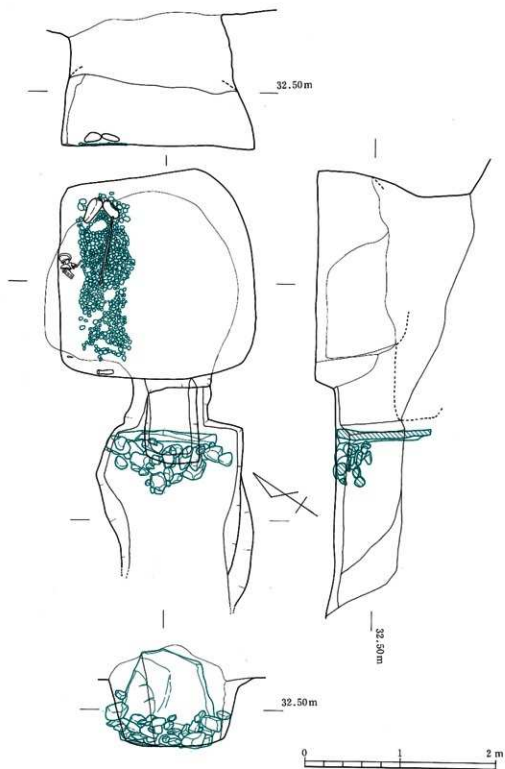
第3層群(Ⅰ・Ⅱ層)は閉塞石上～上半部を覆い25°の角度でほぼ前庭部全面に堆積している。ともに基盤層の二次堆積であるがⅡ層が若干風化している。本層中より須恵器破片が出土した。

2) 羨道、玄室

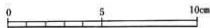
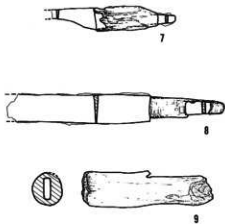
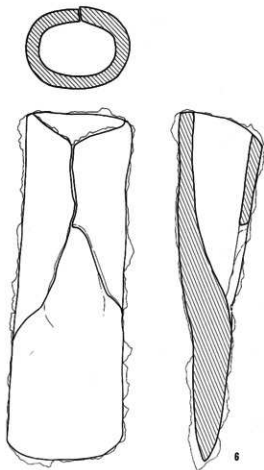
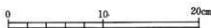
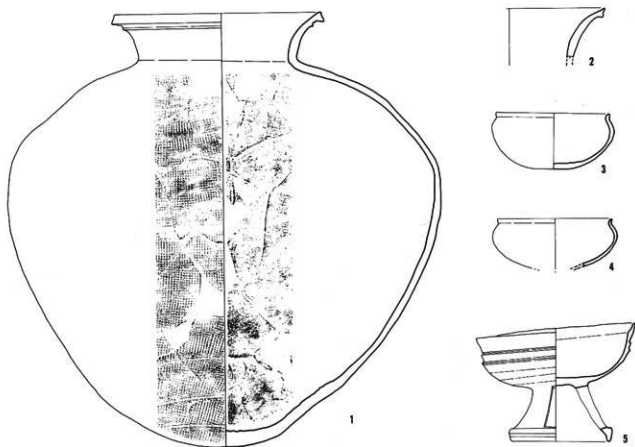
羨道は床面で幅0.63m、長さ0.46mを測る。床面は水平で玄室に向うが、玄室との境で15cm段落ちしている。天井部は崩落により不明であるが、玄室との境には段があったと考えられる。玄室は長さ2.1m、幅2.05mを測



第195図 32号横穴墓縦断土層図



第196图 32号横穴墓平·断面图



第197图 32号横穴墓出土遗物实测图(1)

り略隅丸方形を呈している。床面には2～5cm程度の埋土を玄室全面と羨道に行っている。玄室右側壁にそって長さ1.7m、幅0.5mの長方形に直径7cm以下の河原円礫を敷いて礫床としている。なお、礫床北端部に人頭大の円礫2個を置き石枕としていた。

3. 遺物の出土状態

1) 玄室内

玄室内には人骨の遺存はなく礫床周辺に遺物は多く出土した。まず、礫床ほぼ中央北寄に刃先を羨門方向に向けた直刀一振(第198図10)が、左側壁ぎわ中央で、鹿角装刀子1本(第197図8・9)、須恵器高坏(第197図5)、土師器埴(第197図3)が、奥裾ぎわ中央付近で土師器埴がそれぞれ検出された。なお土器は天井の陥没等で圧砕されていた。また前庭部埋土中より寛片(第197図2)が出土しているが地点が明確でない。(村上久和)



第198図 32号横穴墓出土遺物実測図(2)

第71表 32号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	甕	・21.5 ・45.5 ・45.4	口縁部は外反しなごらのび、端部は面をなし付近の外面に一本の突舌をなす。胴部は、よくはり最大径は、上方にある。底部は、丸みをおびる。	回転ナデ 同心円タタキ スリケン (底部同心円タタキ残存)	タタキを施した後ナデ 回転カキ目	青灰色	石英粒を少量含む	良好	テラス出土? 中津南高校所蔵	
2	甕	・22 (復元径) ・— ・—	口縁部は外反しなごらのび、端部は外面に、わずかな凹面をなし細い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	砂粒を含む 精緻	良好 堅緻		
3	碗	・12.1 ・5.9 ・13	口縁部は内湾しなごらのび、端部は、外側に屈曲し丸い。底部は深く、やや平らである。	ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	暗茶褐色 黒色	砂粒を微量含む 精緻	良好	土師器	
4	碗	・12.1 ・5.2+α (底部欠損) ・13.2	口縁部は内湾しなごらのび、端部は細く、外側に屈曲し丸い。	調整不明	ヘラミガキ	茶褐色	雲母、石英粒を含む 精緻	良好	土師器	
5	高坏	・16.8 ・12 ・—	坏部の口縁部は外反しなごらのび、端部は丸い。外面には、2本の稜が、みられる。胴部は、下外方にのび端部は、外面に直立する面をなし丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	精緻 黒色砂粒を含む	良好 堅緻		

第72表 32号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刀部)	刀幅	頭幅	刀部厚	頭厚	備考
6	鉄斧	18.2		6.0		0.6		
7	刀子	6.5	1.6	1.1	0.8	0.2	0.2	本質柄残存
8	同上	11.4以上	7.5以上	1.4	1.1	0.3	0.25	
9	刀子柄	6.8						鹿角製
10	直刀	75.2	62.6	3.0	1.6	0.6	0.4	目釘穴2個

33号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

33号横穴墓は北支群のほぼ中央寄りに立地し、南西方向に開口する。全長は約9.8mで、標高は墓道前部の上場で35.1mを測る。主軸方向はN-56.5°-Eを測る。保存状態は天井部が陥没しているものの比較的良好であった。本横穴墓発見の契機となったのは、後世削平を受けた部分の遺構確認作業中に、天井部が陥没した状況で検出されたためである。調査は供獻土器群の検出作業を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物、礎床施設等の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約9.8m、幅は入口で約1.0m、墓道前方で約2.7mであり、羨門部に向けて広がる平面形を呈している。上場と床面の比高差は最大で約1.7mである。墓道床面は緩やかな凹凸があるがほぼ平坦に整形されている。傾斜は羨門部全面から約10°の傾斜で入口へ向って下降している。入口から約1.5m手前で、約45°の傾斜で急激に下降し、約1m手前で再び約10°の傾斜で下降し入口に至る。側壁の傾斜は両者ともほとんど差異はなく62~65°を測る。また羨門部壁の傾斜は約85°でほぼ垂直の様相を示す。

羨門部分は天井部分及び側壁部分に若干の崩壊がみられるものの旧状をおおきく損なっているわけではない。残存部分から復元すると、羨門部は高さ約0.6m、幅約0.66mと推定される。

閉塞施設は板石、河原円礫、地山円礫を使用して構築されているが、追葬時に開口された状況で検出された。検出状況は、上面に安山岩板石が1枚、基底部を墓道床面に付け、上部を墓道下方へ押し倒した状態で検出された。板石下方には30cm前後の円礫が、板石を支える状態で検出された。この円礫もまた構築時に羨門付近に存在し、板石を支えていたと推定される。閉塞施設は何度目かの埋葬時に幾らかの閉塞石を除去した後、現存する閉塞石を羨門部から引き倒し、埋葬を行ったと推定している。この除去されたと推定される板石が墓道埋土内から検出された。

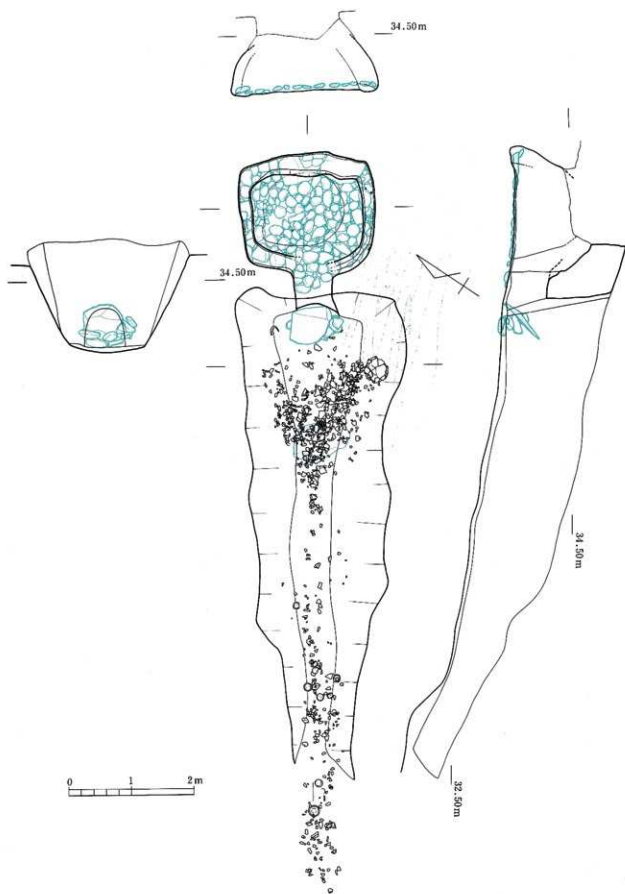
b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は切り合い等で層区分が複雑な部分もあり困難を極めたが、5層群19層に分層した。以下堆積順に説明を加える。

第1層群 (XII・XIII・XVI・XVII層) は墓道全面に堆積している。中央から羨門部付近にかけては、2回目の埋葬時に整地されたと思われる痕跡が観察された。特に羨門部付近は掘り込まれたと考えられる明瞭なラインが確認された。本層群はさらに3層に細分できる。本層群を本横穴墓の初葬時の墓道内埋土と推定している。

第2層群 (IX-XI層) は下層群を覆って墓道全面に堆積している。中央付近は2回目の追葬によって削平されている。羨門部付近は下層群と共に上層から約35°の角度で掘り込まれている。土層観察でみるとこの掘り込みは回目の埋葬によって埋め込まれていると確認された。本層群はさらに3層に細分され下位から(1)炭化物・遺物を含む粘質土層、(2)炭化物・遺物を含む基盤層の粘質土層、(3)炭化物を含む風化土層の順に堆積している。(3)・(4)・(5)はともに風化土層であり、同時期の埋土上面層だと推定している。本層群を2度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第3層群 (IV・V・VI・XIV・XV層) は、閉塞石の下半部分を覆うように堆積している。傾いている板石の上面、いわゆる羨門部側には堆積していないため、この時点での埋葬時には板石を利用した閉塞施設の構築は行われていたと推定される。また土層観察の結果、埋土と閉塞施設を覆っていたであろうが、その後の埋葬時に閉塞施設付近の埋土が除去されたと推定される土層ラインが確認された。また埋土中には河原円礫・地山円礫多数が閉塞施設付近で検出された。本層群を3度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第4層群 (II・III・IV層) は墓道の上場付近からはほぼ一面を覆うような堆積状況を示している。下層群とは整



第199图 33号横穴墓平·断面图

合面をなす。埋葬行為と土層の堆積状況を見ると、まず閉塞石付近の下層埋土を切り込んでいる。その後板石を少なくとも1枚は抜き取る。この抜きとられた板石は埋土内に存在する。抜き取った後、残りの1枚を手前に引き倒している。この時点で埋葬が行われたと推定している。埋葬後は板石を立てかけることなく、別の方法で羨門部を防ぎ、羨門部付近に第1次埋土を行う。その後墓道のほぼ全域に2次、3次の埋土を行う。その後遺物等の埋置を行う。本層群を4度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第5層群(Ⅰ・Ⅱ層)は下層群の上面に堆積しており、整合面をなす、後世の二次堆積土であり、本横穴墓の墓道内埋土に伴うものではない。本横穴墓は、現状の土層観察の結果、少なくとも4回の埋葬行為が行われたと推定している。

2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅約0.6m、長さ約0.58m、高さ約0.62mを測る。床面は約10°の傾斜で玄室へ向って上昇している。天井部は一部崩落のため明確ではないが、ほぼ0~5°の傾斜で玄室方向へ向って上昇していると思われる。玄室は天井部陥没のため高さは不明であるがドーム形を呈していたと推定される。床面で長さ約1.9m、幅約2.2mを測り略方形を呈している。床面は奥壁沿いに2枚の安山岩板を2枚敷き、他の部分には20~30cm前後の扁平河原円礫を敷き詰めている。さらに隙間を補填するように10cm前後の河原小礫で隙間を覆っている。敷石は羨道の一部まで敷かれている。敷石除去後の床面は標高33.6m前後で、羨道との接続地点から玄室中央部にかけては幾分傾斜がみられ上昇傾向にある。また幅20~30cmの排水溝が玄室壁に沿って巡らされている。この排水溝は羨道との接続地点付近で消滅している。

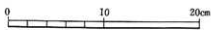
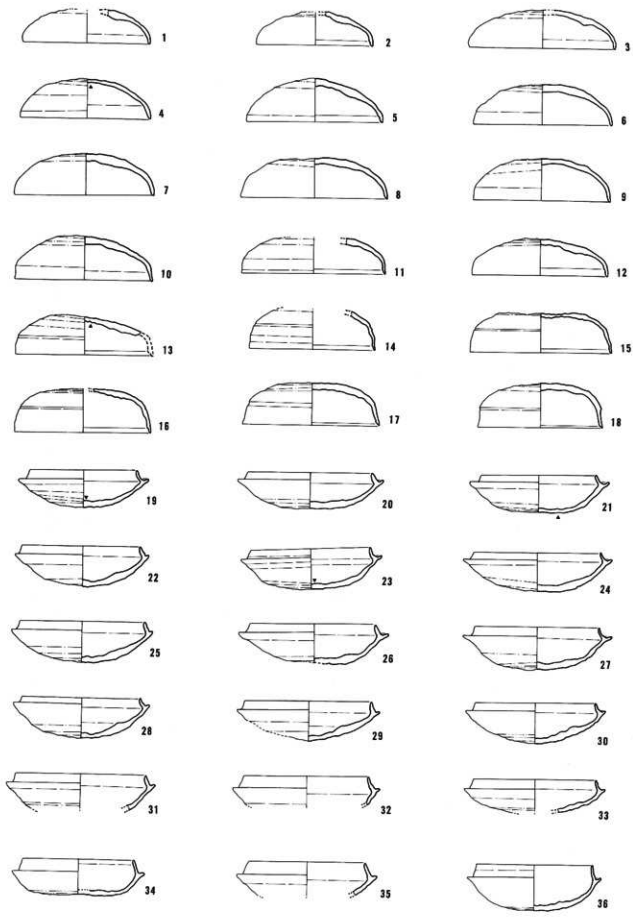
3. 遺物の出土状態

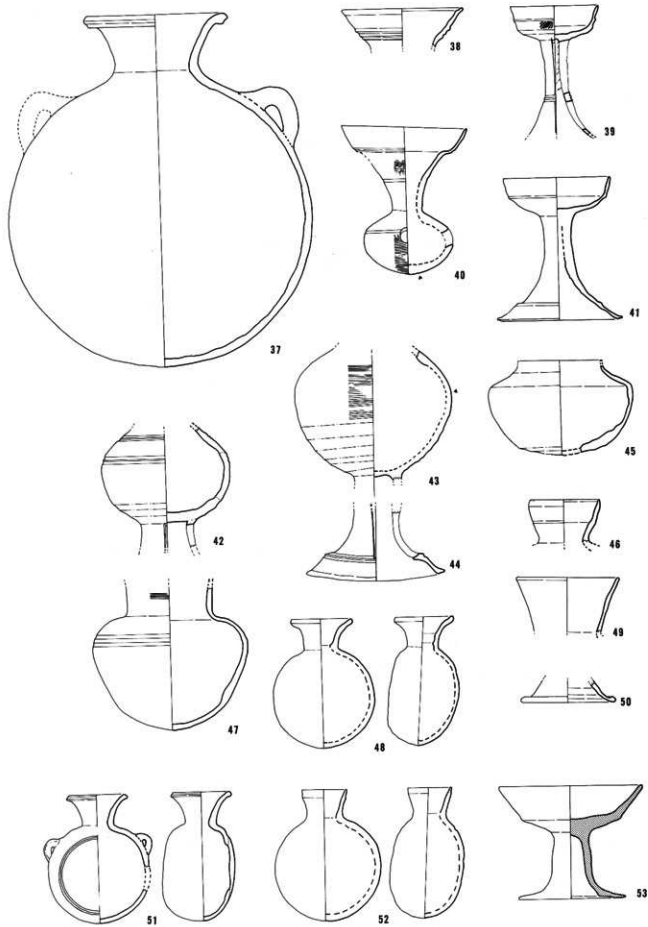
1) 玄室内

玄室からは鉄製品、装身具が検出された。鉄製品は鉄鍔3、鐔1、刀子1、鋤先1点が検出された。鉄製品は全て壁沿いに位置しており群をなすことなく、先端の方向もまちまちである。人骨の残りも無く、初葬時か追葬時の遺物かは判断できない。その後の埋葬時に攪乱されたか、陥没時に動いたと推定している。装身具は耳環1個で、玄室のほぼ中央部の敷石上で検出した。

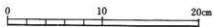
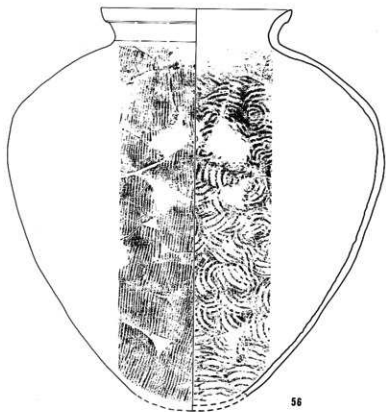
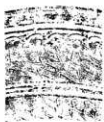
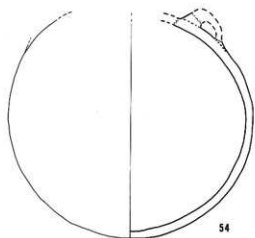
2) 墓道内

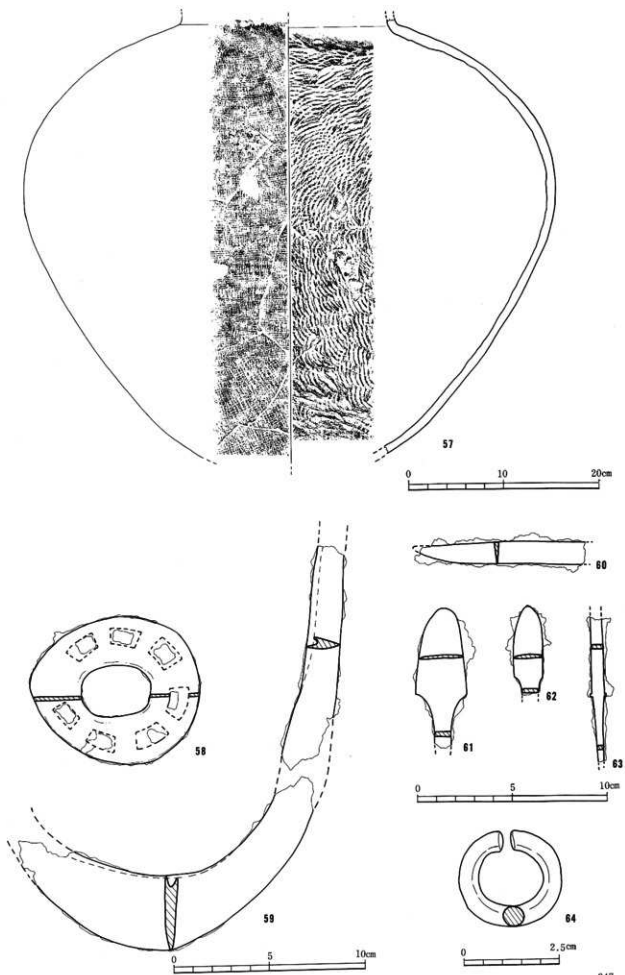
墓道埋土内はほぼ全面から遺物が検出された。このうち群をなすと思われる遺物を抽出すると1ヶ所存在した。この一群は羨門部から約6mの墓道付近に位置する。標高は32.2m前後を測り第2層群下層にあたる。須恵器の坏(第201図19・21~22・24)と提瓶(第202図51)のセットで埋置されたと考えられる状態で検出した。さらに一群から1.5m下降した斜面上に堆積した同層群中に坏(第201図4・23)2点と須恵器片多数が検出された。埋置後、或いは埋土堆積中に先に触れた一群から斜面下方に流れた可能性もある。次に群ではないが甕(第204図57)・壺(第203図56)が破壊された状態で、羨門部から1.5m付近を中心として墓道全域から検出された。検出層は第4層群中である。さらに同層中の羨門部から0.5m付近、標高34.1mの位置に大形の提瓶(第202図37)を墓道側壁に押し付けるように埋置した状態で検出された。(友岡信彦)





第202图 33号横穴墓出土物实测图(2)





第204图 33号横穴墓出土物实测图(4)

第73表 33号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	粘土	焼成		
1	坏蓋	・13.4 ・3.5+ α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～2mmの白色砂粒を少量含む	良好	反転復元	
2	坏蓋	・12.3 ・3.5+ α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや低く丸い。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	淡紫灰色	1mm前後の白色砂粒を少量含む	良好	反転復元	
3	坏蓋	・15.5 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5～1.5mmの白色砂粒を少量含む	良好	反転復元	
4	坏蓋	・13.5 ・4.2 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	1mm以下の石英粒を含む	良好		内面天井部「1」
5	坏蓋	・14 ・4.6 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は、丸く内面に段をなす。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り 後ナデ ヘラ切り 未調整	淡紫灰色	1～5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
6	坏蓋	・14.8 ・4.2 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～2mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
7	坏蓋	・14.6 ・4.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色、灰黒色	石英、黒色砂粒を含む	良好 堅緻		
8	坏蓋	・15.4 ・4.2 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～2mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
9	坏蓋	・14.5 ・4.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1～2.5mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
10	坏蓋	・14.7 ・4.5 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	0.5～3mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
11	坏蓋	・15 ・3.6+ α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面を有す。外面口縁部に筋目あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡灰色 淡灰白色	白色、黒色砂粒を多量に含む	良好	反転復元	
12	坏蓋	・14.2 ・3.8 ・—	口縁部は外反しながら、直下へのび、端部は丸く、内面端部付近に段をなす。天井部は、低く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り後 ナデ ヘラ切り未調整	淡紫灰色	1～5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
13	坏蓋	・14.4 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面を有す。天井部は、やや高く、丸みをおびる。外面には、稜がみられる。	回転ナデ 同心円タテキ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黄灰色 青灰色	石英粒を含む	良好		内面にスタンブ紋あり
14	坏蓋	・13.2 ・4.2+ α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は細くなり段をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	細かい白色黒色砂粒を含む	良好		

番 号	器 種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号 の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
15	坏 蓋	・14.9 ・4.1 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は細く丸く、内面に沈線あり。外面には、稜がみられる。天井部は、低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡青灰色	細黒色砂粒を含む	良好		
16	坏 蓋	・14.4 ・4.7+a ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部は、高く丸みをおびる。外面には、稜がみとめられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡灰色	細砂粒を含む	良好	反転復元	
17	坏 蓋	・14.2 ・4.5 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は、内傾する凹面をなす。天井部は、やや高く丸みをおびる。外面には、稜がうすくみられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	黄灰色	細白色砂粒を含む	良好		
18	坏 蓋	・13.2 ・4.7 ・—	口縁部は外反しながらほぼ直下へのび、端部は内傾する段を有す。天井部は、やや高く丸みをおびる。外面には、稜がみられる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	暗黄灰色 淡黄灰色	細砂粒を含む	良好		
19	坏 身	・11.2 ・4 ・13.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方へのび、端部は丸い。底部は、深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰白色	石英粒を多量に含む	良好		内面底部 「I」
20	坏 身	・13.1 ・3.7 ・15.5	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い、受部は上外方へのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	明青灰色	0.5 - 2mmの白色砂粒を少量含む	良好		
21	坏 身	・12 ・3.8 ・14.6	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い、受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は、やや浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰褐色	2 - 3mmの石英粒を含む	良好		外面底部 「N」
22	坏 身	・12.6 ・4.2 ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は短く上外方へのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	0.5 - 2mmの白色砂粒を多量に含む	良好		
23	坏 身	・12.5 ・4.2 ・14.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰白色	石英粒を含む	良好		内面底部 「X」
24	坏 身	・13.5 ・4.1 ・15.9	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は短く上外方へのび、端部は丸い。底部はやや浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	明青灰色	0.5 - 2mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
25	坏 身	・13 ・4.3 ・14.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は短く上外方へのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	0.5 - 1.5mm白色砂粒を含む	良好 堅緻		
26	坏 身	・13.2 ・3.9 ・15.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方へのび、端部は丸い。底部はやや浅く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡黄灰 - 淡 青灰色	細砂粒を含む	良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
27	坏身	・13.2 ・4.4 ・15.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	淡青灰色	細砂粒を多量に含む	良好		
28	坏身	・12.5 ・4.2 ・14.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	青灰色	1 - 1.5mmの白色砂粒を含む	良好		
29	坏身	・13.2 ・4.2 ・14.8	たちあがりほぼ直立してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ へら切り様ナデ	淡紫灰色 淡青灰色	0.5 - 1mmの白色砂粒を含む	良好		
30	坏身	・12.6 ・4.2 ・14.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅くやや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	淡黄灰 - 淡青灰色	細砂粒を含む	良好		
31	坏身	・13.6 ・3.9 + a ・15.6	たちあがりは内傾してのび、端部はややとがりざみ。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	淡青灰色	細砂粒を多量に含む	良好	反転復元	
32	坏身	・13 ・3 + a ・15.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	黄灰色	白色砂粒を含む	良好		
33	坏身	・12.8 ・3.5 + a ・14.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	灰青色 赤紫色	石英粒を含む	良好	反転復元	
34	坏身	・11.6 ・3.8 ・14	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	淡青灰色	細黒色砂粒を含む	良好		
35	坏身	・12.2 ・3.5 + a ・14.6	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色	白色砂粒を含む	良好		
36	坏身	・12.2 ・4.7 ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段を有す。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転へらナズリ	青灰色 淡青灰色	細砂粒を含む	良好	反転復元	
37	提瓶	・14.6 ・37.2 ・32.1	口頸部は外反しながらのび、端部は段をなし肥厚する。胴部は円形を呈し、外面両側に把手がつく。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	灰黒色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻	内・外面とも、自然軸が多量に付着。緑黒色、茶褐色を呈す。	
38	甕	・12.8 ・4.7 + a ・ -	口頸部は外反しながらのび、外面中央部に3本の稜線あり。端部は内傾する段を有す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	1 - 2mmの石英粒を含む	やや良好		
39	高坏	・9.2 ・13.5 + a ・ -	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外側には、稜がみられる。脚部は、下外方にのびる。外面中央部に、2本の沈線あり。長方形2段スカシ窓あり。	回転ナデ	回転ナデ 髷摺列点文 回転へらケズリの後回転ナデ	暗灰 - 灰色 黄灰色	1 - 2mmの石英、細砂粒を多量に含む	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
40	罎	・13.1 ・15.6 ・9.3	口頸部は外反しながらのび、端部付近で屈曲し、その外面に1本の沈線をなす。外面中央部に、1本の沈線あり。端部は丸い。胴部はだ円形を呈し底部は、とがりぎみ。中央部に穿孔あり。	回転ナデ	回転ナデ 液状文 回転カキ目	青灰色	0.5-1.5mmの角閃石 石英粒を少量含む	良好		外面底部 「M」
41	高坏	・11.2 ・1.5 ・-	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。外面は稜がみられる。端部は、下外方にのび、端部付近で、肥厚し段をなす。端部は、凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	黄灰色	1-2mmの石英粒を含む	良好 堅緻		
42	脚付蓋	・口頸部欠損 ・13+a ・脚部半分欠損	胴部はだ円形を呈し、外面料部に2ヶ所、2条の沈線あり。脚部は下外方にのび、四角形スカシあり。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 鑿刻列点文 鑿刻ヘラケズリ 回転カキ目	青灰色	石英 黒色粒を含む	良好 堅緻		
43	台付蓋	・- ・13.4 ・16.4	胴部はほぼ円形を呈し、最大径はやや上部にある。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目 鑿刻ヘラケズリ	青灰色	1-5.5mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		外面胴部 「I」
44	脚部	・14.5 (底部) ・7.5 ・-	脚部は下外方にのび、端部付近で外側に屈曲し、その外面に1本の沈線をなす。端部は凹面をなす。スカシ窓が3方向からある。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	0.5mm前後の角閃石 石英粒を少量含む	良好		形がひずんでいる
45	短頸蓋	・9+a (覆元径) ・9.9+a ・15.4	胴部はよくはり最大径は上方にある。底部は丸みをおびる。外面料部に蓋の端部が付着している。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を含む	良好 堅緻		
46	提瓶	・7.2 ・5+a ・-	口頸部は外反しながらのび端部は丸く内面に沈線をなす。外面中央部に1本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 自然軸による黒色	精緻	良好 堅緻		口縁部のみ
47	壺	・口縁部欠損 ・15.1 ・16.2	口頸部は直立してのびる。胴部はだ円形を呈し、最大径は上方にある。底部は丸みをおびる。外面胴部の最大径付近に2条の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ ヘラ状のもので不定方向に調整	青灰色 淡紫灰色	0.5-1.5mmの白色砂粒を少量含む	良好		
48	提瓶	・6.3 ・13.6 ・10.3	口頸部は外反しながらのび、端部は、面をなす。胴部は円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	0.5-2mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好		
49	口頸部	・10.6 ・6+a ・-	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	灰色	1mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
50	高坏	・9.5 (底部) ・2.5+a ・-	脚部は下外方にのび、端部は肥厚し段をなし丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 黒色	1-2mm大の石英粒を含む	良好 堅緻		脚部のみ
51	提瓶	・5.8 ・13.5 ・10.7	口頸部は外反しながらのび、端部は外面に凹面をなす。胴部は円形を呈し外面両側に、輪状の把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 鑿刻ヘラケズリ 2条の沈線あり	青灰色	0.5-2.5mmの白色砂粒を多量に含む	やや良好		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へつ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
52	提風	・4.6 ・14 ・11.2	口頸部は外反しながらのび、端部は細くなり丸い。胴部は円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラズリ 後部分的に 回転カキ目	青灰色	0.5～1mm の角閃石 白色砂粒を 含む	良好		
53	高坏	・15 ・12 ・	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には、稜がうすくみられる。胴部は下外方にのび、底部はほぼ水平にのびる。端部は丸い。	ヘラミガキ ナデ	ヘラミガキ ナデ	明茶褐色	石英、雲母 粒を含むが 精緻	良好 堅緻	土師器	
54	提風	・ ・23.2+ ・25.6	胴部は円形を呈し外面片肩部に輪状の把手がついていた痕跡あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 部分的に平 行タタキあり	黒灰色 赤紫色 紫灰色	石英粒を含 む	良好		
55	壺	・34.4 ・10+ ・	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し段をなし丸い。外面中央部に2本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 帯幅流状文	灰色 暗青灰色	精緻	良好 堅緻		
56	壺	・40.1 ・41.7 ・39.4	口頸部は外反しながらのび、端部は肥厚し面をなす。胴部の最大径は、上方にある。底部は、ややとがりきみで丸い。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキを施 したあと回 転カキ目	黒灰色	石英粒を含 む精緻	良好 堅緻		
57	壺	・ ・45.2+ ・57.4	胴部の最大径は、上方にある。	同心円タタキ	タタキを施 したあと回 転カキ目	青灰色	1～2mmの 白色砂粒角 閃石を少量 含むが精緻	良好 やや軟質		

第74表 33号横穴墓出土鉄器・耳環観察表

(単位: cm, g)

番号	型式名	全長	頸部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
58	鏢							7方透しを有する
59	鏢	24.5以上		4.0		0.7		
60	刀子	8.6以上	8.6以上	1.2	不明	0.2	不明	
61	鉄鏢	7.3以上	4.5	2.6	1.1	0.2	0.25	
62	同上	4.6以上	3.6	1.5	0.9	0.2	0.2	
63	同上	7.4以上	不明	不明	0.6	不明	0.2	頸部
番号	器種	外径		断面径		重量		備考
64	耳環	2.7×2.5		0.5×0.5		12		銅地金張

34号横穴墓

1. 立地、調査前の状況

34号横穴墓は群中のほぼ中央斜面下方に立地し、南西方向に開口する。全長は約3.35mで前庭部入口床面で標高32.7mを測る。主軸方向はN-56.5°-Eを測る。保存状態は羨道天井部の陥没等がみられ、良好とはいえない。本横穴墓は調査以前に羨道部陥没後の凹穴にゴミ等を投棄していたため横穴墓の存在は確認できなかった。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設除去後、玄室内のゴミ、崩落土等の除去作業を行い、遺物・礎床等の調査を実施した。

2. 規模、構造

1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は床面で長さ1.1m、幅は羨門付近で1.25m、入口付近で約0.6mを測り逆台形状を呈す。床面は若干凹凸があるが入口から羨門まではほぼ水平である。羨門で約10cmの段をもち高くなる。

羨門は天井、側壁とも崩壊が著しく、復元は困難であり、幅は床面で0.65mを測る。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し構築されているが、後世の攪乱等により全体に玄室方向に倒壊している。閉塞の配石は形状によって次の3工程に分けられる。第1工程は長さ60cm、幅40cm、厚さ8cm前後の安山岩製板石2枚と長さ40cm、幅30cm、厚さ5cmの板石一枚、計3枚で羨門を覆う。いずれの板石も羨門側の面にベンガラを塗布する。第2工程は、人頭大かやや大形の円礫を8個使用して板石の下面を支え隙間を覆う。第3工程は、2工程を根石として大形の円礫3個で板石の上-中面を支え隙間を覆う。以上の配石によって前庭部の4分の1が埋まる。この配石後に閉塞施設全体を覆うように埋土がなされている。

b) 前庭部内埋土 前庭部内埋土の先端部は横穴墓の確認が遅れた為カットされていたが、ほぼその状況は理解でき、4層群6層に分層した。以下堆積順に説明を加える。

第1層群 (VI層) は、前庭部全体に水平堆積した基盤土で構成された層である。上層とは固さで区分でき、羨門付近で上面を第2層群によってカットされている。初葬時の埋土と考えられる。

第2層群 (III-V層) は、前庭部全体に約5°前後の傾斜で堆積している。本層群は3層に細分される。下位から、(1)閉塞石全体を覆い、基盤土で構成された層 (V層) である。上層とは漸移的な変化をする。(2)閉塞石上端を覆い、基盤土で構成された層 (IV層) である。上層とは漸移的な変化をする。(3)性状等V層に類似した層 (III層) で上面はやや風化している。本層群は追葬時の埋土と考えられる。

第3層群 (II層) は、前庭部全体に約2°前後の傾斜で堆積している。黒褐色の風化の著しい層で旧表土と考えられる。

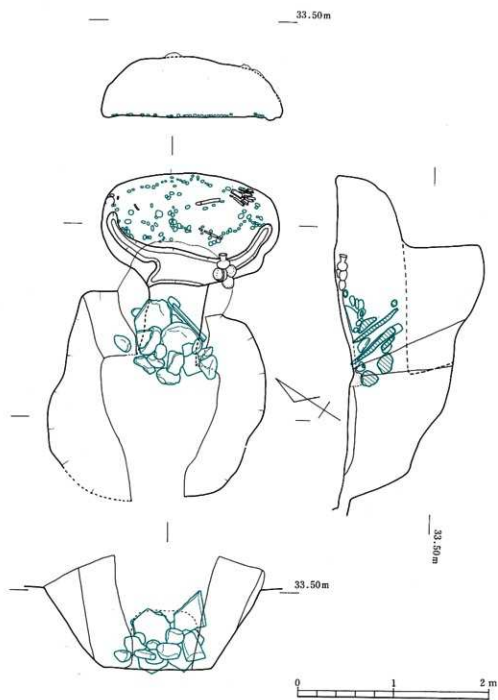
第4層群 (I層) は、近年の造成による埋土である。

本横穴墓は堆積埋土の観察結果、2度の埋葬行為が行われたと推定されるが、玄室内の保存状態が良くないの一体分の人骨しか検出できず、第2層群の解釈に苦しむが、2度の開口行為があったことは確かである。

2) 羨道、玄室

羨道は天井、側壁上部が陥没しており旧状を大きく損なっている。このため高さは不明である。床面は長さ0.81m、幅0.58mを測り、長いのが特徴である。床面は約15°の傾斜で玄室に向かって下降する。玄室との境は約5cmの段差を持ち玄室が低い。

玄室は長さ1.13m、幅1.88mの平入卵形を呈している。高さは玄室中央で0.6mを測る。床面はほぼ平坦で左右裾部側から玄室入口付近にかけて幅15cm、深さ5cmの浅い排水溝を作る。玄室中央から奥壁ぎわにかけて、長さ1.55m、幅0.7mの楕円形状の範囲に直径7cm以下の河原円礫を敷いて礎床としている。玄室内には羨道の崩落部からゴミ等の流入土が堆積していたが、礎床の中央~奥壁寄りには埋没から免れていた。天井部はドーム状を呈し羨道との関係は明らかでないが、閉塞石の高さから推定して段を持たずに羨門まで続くかと推定される。壁面、



第205图 34号横穴墓平・断面图

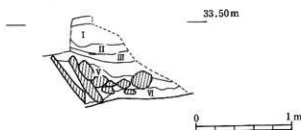
天井部にはベンガラが塗布されている。

3. 遺物の出土状況

1) 玄室内

a) 埋葬人骨 1体のみが埋葬されていたと推定される。左側壁の奥壁寄りに磔床より転び落ちた状態で頭蓋骨片が3個、磔床上の左側壁寄りに上腕骨、右側壁寄りに左大腿骨と左右脛骨が検出されたが、保存状態が良くなく取り上げ中に細骨片になった。

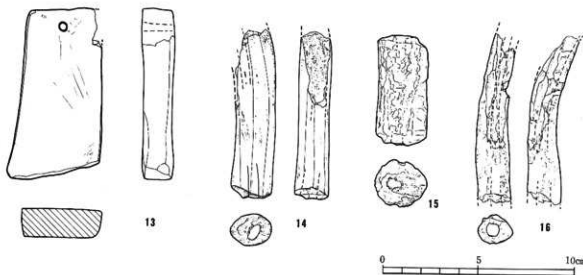
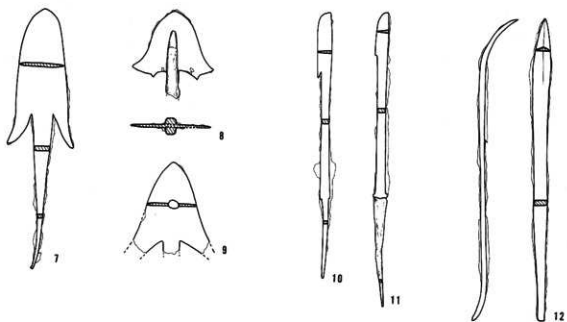
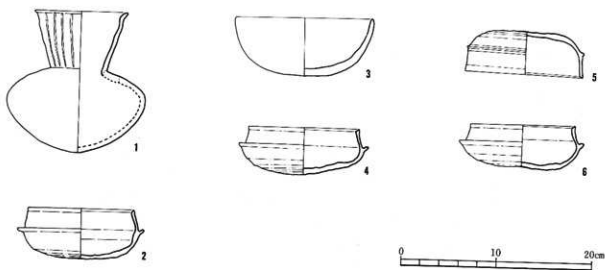
b) 副葬品 遺物は、右裾壁の玄室入口付近で須恵器坏蓋1個(第207図5)、坏身3個(第207図2・4・6)、土師器直口壺1個(第207図1)、埴1個(第207図3)が一括埋置された状態で検出された。また、奥壁の右側壁とのコーナー付近(左脛骨の左下)で鉄鎌5本、鉋1本、砥石1個、鹿角製品3本が一括埋置された状態で検出された。なお、鉄鎌、鉋は刃先を右側壁方向に向けている。(村上久和)



34号横穴墓土層観察表

層	色	調	主な特色	性	表	評価・解釈
I	茶褐色		粘質土			近時造成時の標土
II	黒褐色		粘質土		風化が激しく凍入している。	旧表土
III	黄褐色		粘質土		ハード	III-Vは造葬埋土
IV	灰褐色		粘質土		ハード	
V	黄褐色		砂質土		やや中砂する。地山礫を含む。下層は砂質となる。	
VI	黄褐色		砂質土		砂質・地山礫で構成される。	造葬埋土

第206図 34号横穴墓縦断土層図



第75表 34号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	真口壺	・9.9 ・14.9 ・14.5	口頸部は外反しながらのび、端部はわずかに外側に屈曲し丸い。胴部は、だ円形を呈し最大径は、中央部にある。底部はややとがりさみである。	ハケ目後ナデ	ヨコナデを施したあと、暗文を掻しその上からハケ目	淡赤褐色	0.5~2.5mmの石英粒を含む	やや不良	土師器	
2	坏身	・11.2 ・5.2 ・13.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸く内傾する面を有す。受部は、わずかに上外方にのび丸い。底部は深くやや平らである。	回転ナデ 指オサエ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	1~4mmの石英粒を多量に含む	良好	受部に故意にうち欠いた痕跡あり	
3	碗	・14.2 ・6.1 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は深くやや平らである。	へうのようなもので調整	ハケ目のあとナデ消している	淡赤褐色	0.3~6mmの角閃石、長石粒をやや多量に含む	やや不良	土師器 器面が荒れている	
4	坏身	・11.5 ・4.9 ・13.6	たちあがりは内傾してのび端部は、内傾する凹面を有す。受部は上外方にのび端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	黒青灰色	0.5~3mmの石英、雲母の細砂粒を微量含む	良好 堅緻	たちあがり受部に故意にうち欠いた部分があわずかにみられる	
5	坏蓋	・12.6 ・4.4 ・-	口縁部はほぼ直下へのび端部は内傾する段を有す。外面には鋭い稜を有す。天井部は高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色 天井の一部に灰青色、黒灰色の部分あり	1~2.5mmの石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
6	坏身	・11.2 ・4.3 ・13.4	たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する段を有すが丸みをおびる。受部はほぼ水平へのびる。底部はやや深い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	黒灰色 灰色	1~3mmの石英粒を多量に含む	良好 堅緻	たちあがり、受部に故意にうち欠いた痕跡あり	

第76表 34号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頸部長(刀部)	刃幅	頸幅	刀部厚	頸厚	備考
7	鉄鏃	13.6	7.1	2.7	1.0	0.2	0.25	
8	同上	3.8	4.3	4.3	0.8	0.1	0.1	重鉄、木質柄残存
9	同上	4.7以上	4.7以上	4.0	0.8	0.2	不明	
10	同上	13.9	3.4	0.7	0.5	0.1	0.2	
11	同上	15.4	2.2	0.7	0.5	0.2	0.25	木質残存
12	鉾	15.8	3.6	1.2	0.8	0.2	0.3	

第77表 34号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	幅	厚さ	材質	備考
13	砥石	9.0	4.2	1.5	砂質	先端部に穿孔あり四面とも使用痕が認められる

第78表 34号横穴墓出土骨角器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	幅	厚さ	材質	備考
14	不明	8.8+*	2.1	1.8	鹿角	鹿角の先端を利用、鋭を穿り穿孔する
15	不明	5.8	2.2	2.4	鹿角	
16	不明	9.0+*	1.8	1.5	鹿角	鹿角の先端を利用